

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

ASEANの中のラオスー農業・観光振興を通じた発展  
は可能かー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2020-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: パンパディット, パンダラ, ヴィサテップ, スクサバン, 瀬尾, 充, 坂田, 幹男, PHANPRADISH, Phandara, VIXATHEP, Souksavanh, SEO, Mitsuru, SAKATA, Mikio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/913">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/913</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 〔国際シンポジウム〕

2018年度大阪商業大学比較地域研究所国際シンポジウム

## ASEANの中のラオス

—農業・観光振興を通じた発展は可能か—

- 主 催 大阪商業大学比較地域研究所
- 使用言語 日本語
- 日 程 平成30年10月6日午後2時～午後5時40分
- 会 場 大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天

## 第一部 基調講演

- ① ラオスとASEANの経済発展における農業部門の役割  
—「持続可能な発展」戦略を求めて—  
ラオス農林省・農業局計画・協力課 課長  
パンパディット・パンダラ(Phanpadith PHANDARA)
- ② ラオス農業の発展の可能性  
瀬尾 充  
元ラオス農林省農業政策アドバイザー
- ③ ラオスにおける経済発展と工業化  
ヴィサテップ・スクサバン(Souksavanh VIXATHEP)  
兵庫県立大学経済学部准教授

## 第二部 パネルディスカッション

パネリスト 上記発表者  
司会

大阪商業大学経済学部教授 坂田 幹男  
(敬称略)

## はじめに

**進行** 皆さま、お待たせいたしました。それでは、これより大阪商業大学比較地域研究所主催、日本貿易振興機構大阪本部後援の国際シンポジウム、「ASEANの中のラオス—農業・観光振興を通じた発展は可能か—」を開始いたします。本日はラオス農林省農業局計画・協力課課長でいらっしゃいます、パンパディット・パンダラ氏、兵庫県立大学経済学部准教授 ヴィサテップ・スクサバン先生、元ラオス農林省農業政策アドバイザーで現在農林水産省国際地域課国際交渉官でいらっしゃいます瀬尾充氏にお越しいただき、講演とディスカッションをしていただきます。まず、開会のあいさつといたしまして、本学副学長、片山隆男よりごあいさつ申し上げます。

**片山** 皆さん、こんにちは。心配された台風は日本海のほうにそれましたが、随分と蒸し暑い日になっております。ご体調にくれぐれもお気を付けいただきたいと思います。

今日は比較地域研究所が主催いたします国際シンポジウムで、ラオスを取り上げてくださいました。ラオスに行かれた方は非常に少ないかも知れませんが、このタイトルにもありますように非常に興味深い国だと思っています。先般来より新聞を見ておきますと、ラオスは農業・観光を持って立国するのではないかと言われています。私もそういうものを読んで、非常に興味を持っておりました。

なぜかというと、日本は明治維新からちょうど150年になりますが、日本はそのときの社会情勢、世界的な環境の中で産業化の道を選びました。その長い150年の歴史で、大きく産業を発展させてきました。その中でいろいろな社会的課題を抱えて、それをどう解決するかが問われてきました。今日でも、これは本学の大学院や比較地域研究所に期待されている研究テーマでもあります。今回はこれから本格的な発展を目指すラオスがどう成長するのかという方向性などについて、直接政策にかかわっておられる方やこの方面に非常に知識の深い方々にお話を伺うという貴重な機会であろうかと思えます。皆様方には少し長時間に及びますが、最後までご静聴願いたいと思えます。どうぞ最後までよろしくお願いいいたします。ありがとうございました。

**進行** 片山先生、ありがとうございました。

## ラオスとASEANの経済発展における農業部門の役割

—「持続可能な発展」戦略を求めて—

ラオス農林省・農業局計画・協力課 課長

パンパディット・パンダラ (Phanpadith PHANDARA)

**進行** それでは、まず坂田先生より、パンパディット・パンダラ氏のご経歴を簡単にご紹介させていただきましてから、パンダラさんにご講演いただきます。よろしく願いいたします。

**坂田** 本日の司会を務めさせていただきます、経済学部の坂田と申します。どうぞ最後までお付き合いのほど、よろしく願いいたします。本日はラオスの農業省からパンパディット・パンダラさんをお招きして、ラオスの農業・観光を中心としたシンポジウムを企画いたしました。私とパンダラさんとは、もう数年来の付き合いになります。私は毎年ラオスに調査に出かけますが、そのときには必ずパンダラさんが私と一緒に車で同行してくださり、これまでかなり親しく付き合いをさせていただいてまいりました。最初に、パンダラさんのご紹介を簡単にさせていただきたいと思います。

パンダラさんはタイの大学をご卒業になりました。その後、日本に留学したいということで、1年間マレーシアの大学で日本語を勉強され、そして国費留学として日本の静岡大学の大学院に進まれました。静岡大学大学院で6年間農学の研究をされ、主にトマトの研究だと聞いていますが、その研究をまとめられ、博士の学位を取得された後、ラオスに帰られ、ラオスの農林省に就職されました。現在は農業局の課長さんですので、随分偉くなられました。今日はラオスの農業についてお話をいただきたいと思います。



パンパディット・パンダラ氏

それから、こちらのほうに座っておられますのは、現在、大阪府立大学にラオスから留学されているアパイオン・センサワン君です。パンダラさんは日本語はとてもお上手なのですが、もし、困った場合には、アパイオンさんに通訳してもらおうということで座っていただいております。よろしく願いいたします。それでは、パンダラさん、どうぞよろしく願いいたします。

**パンダラ** 皆様、こんにちは。パンダラと申します。恥ずかしいですが、8年ぶりの日本語での発表ですので、もし、発音や言葉使いが間違ったら、大変申し訳ありませんが、お許しください。何とか頑張ってみます。今日の私の発表の概要は、2つの部分に分かれています。第1部では、ASEANについて、ちょっと広い面で話しをしてみたいと思っております。第2部では、ASEANの中のラオスについて発表します。よろしく願いいたします。

第1部は、ASEANにおける農業部門の発展です。ASEANにおける農業発展につい

てお話しする前に、5、6枚のスライド写真を見ていただきます。私の発表の中心は、ASEANとラオスの農業ですが、最初に、日本の農業の現状について写真を見ていただきます。多分皆さまは日本の農業の現状についてご存じない方もおられるかもしれませんが、ちょっと簡単な日本の農業特性とASEANの農業の特性を比べてみたいと思います。この写真は日本の農業の特性を示したものです。ちょっと皆さん想像してください。日本の農業はどういう農業でしょうか。上の写真は、私が6年間住んでいた静岡の茶畑です。私の大好きな光景です。あと、草取りまでで機械を使っています。灌漑システムもとても高い技術を使っています。次の写真は温室栽培です。温室内の野菜栽培でも全部環境はコントロールできます。温度・湿度、全部機械でコントロールするんです。ドローンも使っています。虫の調査とか、そういった方面で使われています。次の写真は何かわかりますか。これは植物工場です。自然の光ではなく、LEDライトで大量に野菜を育てます。次の写真は、日本の近い将来の植物工場です。今でも東京に1つ工場があります。工場のラインに植物の種や苗を植えて、成長したのちに収穫できます。これが、今の日本の農業の最新の姿です。

日本はこのような状況ですが、それではASEANの国はどうでしょうか。皆さんご存知のように、ASEANは10カ国ですが、かなりの発展差があります。この写真はASEANでも発展しているマレーシアの温室栽培です。温室栽培はベトナムでも行われています。でも、大部分の畑は、外で栽培されています。写真のような農業機械を使った稲作も行われています。次の写真は、おそらく皆さんはご存じないでしょう。これはコショウです。ベトナムとラオスの南部ではよく栽培されています。

これらについては、まだ発展してない国で、農業地帯でも大体機械はあんまり使われていなくて、人力で行われています。それから、みんなの協力で行われています。多分日本の100年前はそういう状態だったと思います。協力してお互いに手伝う。今日は、ある人の畑で、次の日は別の人の畑でというふうに、集団でやっています。次の写真は、ラオスの焼き畑農業です。現在、ラオスの政府は環境破壊につながる焼き畑農業をやめさせるよう頑張っていますが、しかし北部のほうは山岳地帯で農業面積が少ないので、焼き畑をしないと食料が足りないという状況があります。

次の写真は、コーヒーとトウモロコシ栽培の畑です。皆さんはたぶん気が付かれたと思いますが、この畑を見ると、同じ作物が広範囲に栽培されているわけではなくて、ミックスされています。このような方法は、手間もかかるんですが、いい点もあります。害虫などがあまり発生しないんです。もし、莫大な面積で同じ植物を栽培すると、害虫や病気が多くなります。

それでは、現在のASEANの農業の特徴はどのようなものでしょうか。まず表1を見てください。ASEAN10カ国のGDPに含める農業割合は、例えばシンガポールとかブルネイなど発展した国は、GDPに占める農業の割合が小さいのですが、ASEANの中でも発展の遅れているカンボジアとラオス、ミャンマーは、GDPに占める農業の割合はまだ高くなっています。なぜ発展した国はGDPに占める農業の割合が小さいのかというと、それらの

表1 ASEAN諸国のGDPに占める農業の割合(2017年) 表2 ASEAN諸国における農業就業人口

ASEAN Country	% of GDP, Agriculture
Brunei	0.9
Cambodia	30.5
Indonesia	13.7
Laos	24.8
Malaysia	9.0
Myanmar	27.9
Philippines	11.3
Singapore	N/A
Thailand	10.5
Viet Nam	18.1

Source: BCSO Singapore, PBE, Indonesia  
BCSD & Viet Nam BCSO, 2016

ASEAN諸国	基準年	比率 (%)
ブルネイ	2014	0.6
カンボジア	2012	54.85
インドネシア	2014	34.00
ラオス	2015	72.67
マレーシア	2015	12.47
ミャンマー		-
フィリピン	2013	31.52
シンガポール		-
タイ	2015	32.28
ベトナム	2014	46.28

資料: ASEAN, 2016

国では農産物はほとんど加工食品にされているので、農業の割合は低くなるんです。

次の表2はASEAN諸国における農業人口を示したものです。この表からみられるように、カンボジアとラオスでは農業就業人口の割合が高くなっています。ラオスでは、農業就業人口は、依然として72%にも達します。私には日本のデータがないですけど、日本の農業就業人口は絶対的に少ないでしょう。実は、シンガポールは、農業をやる人はもういないのです。農業就業人口は0%で、ほとんどの人がサービス業などのビジネスに従事しています。それに、ブルネイの農業就業人口の割合は0.6%ですが、ブルネイは特別な国で、人口自体でも40万人くらいしかいないんです。だからブルネイは大体、石油とか天然ガスの輸出などが中心です。

次に、図1は、ASEAN各国のコメの生産量を示したものです。ASEAN10カ国のうち、一番生産量が多いのはインドネシアですね。インドネシアは、約8,000万トンです。しかし、インドネシアはお米を一番多く生産しているのですが、輸出量は少ないんです。なぜなら、インドネシアは人口自体も多いです。インドネシアの人口は、2.5億人もいるんです。だから、人口と比べると生産量はまだ少ないのです。逆に、タイとベトナムはコメ輸出国になっています。

次に、ASEANにおける農業部門の発展についてみていきます。ASEANでは、「食料・農業・林業に関するASEAN協力のためのビジョン及び戦略的計画」とか、「作物についてのASEAN協力に関する戦略的行動計画」、さらに「ASEAN標準への協調」など、戦略的計画や行動計画を策定してきました。とくに、「ASEAN標準」への取り組みでは、多分皆さまは聞いたことがないと思いますが、GAP(Good Agricultural Practice: 農業生産工程管理)とかSPS(Sanitary and Phytosanitary Measures)とかMRL(Maximum Residue Limit)といった「ASEAN標準」が取り組まれています。GAPというのは、農作物をつくる際のスタンダードです。GAPに関しては、農薬や化学肥料を使うことができますが、使える量と使い方についての基準が決まっています。さらに、OA(Organic Agriculture)は、日本ではなじみが深いと思いますが、有機栽培のことです。有機栽培スタンダードでは農薬や化学肥料などは一切使うことはできません。

次に、ASEAN諸国の農業発展への取り組みについて述べたいと思います。ASEANは、

今、人口が増加しています。したがって、食料の増産は重要な課題です。さらに、世界中で温暖化のために、気候変動が激しくなっています。例えば、台風も多く発生しています。したがって、温暖化対策、気候変動対策が重要な課題となっています。さらに農業に関する「ASEAN標準」作りは、現在ASEAN各国が協力して発展させています。

最後に、ASEAN諸国の農業の展望についてですが、ASEANの諸国の中ではいくつかの国では、米・トウモロコシなどの作付面積の減少がみられるものの、ASEAN全体および多く国では、農産物の増加が見られます。つまり、ASEAN諸国は、昔はお米とトウモロコシだけを多く栽培していましたが、今では、お米とトウモロコシの作付面積はだんだん減って、いろいろな種類の作物が栽培されています。このことは、農業の多様化が進んでいることを意味しているといえます。

それでは次に、第2部としてラオスの農業について述べてみたいと思います。最初にラオスの簡単な説明をしておきたいと思います。ラオスは小さい国です。23.7万平方キロメートルしかありません。日本は37.8万平方キロメートルですから日本の3分の2くらいでしょうか。さらにラオスは日本と同じでように山国です。国土の80%くらいは山です。したがって、高地が多く平地は少なくなっています。作物生産のできる平地はわずか20%に過ぎません。そのうち、農地は約12%だけです。ラオスの人口は少なく、690万人しかいません。しかも、農業就業人口は72%にもなります。この72%の中で、大雑把に言って、70%はお米栽培をしています。GDPでいうと、GDPに占める農業の割合は、24%にもなります。主な作物は、お米、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビ、コーヒーなどです。最近一番取り組まれているのが、有機野菜です。

図4は、ラオスの地図です。ラオスは周辺国に囲まれた内陸国です。実は海に面していない国で、これも1つの国の発展のチャレンジです。北のほうは、中国、東はベトナム、西はタイとミャンマー、南はカンボジアと、5カ国に囲まれています。ラオスの国土は、北部、中部、南部に分けられています。全部で18県あります。

表3は、ラオスの作物生産量と作付面積を示しています。作付面積は、合計でも約80万ヘクタールしかありません。作物生産量は、合計で900万トンです。表4は、コメの作付面積と生産量を示したものです。大体ラオスには、広い平地はあんまりないです。このスラ

図4 ラオスの位置と行政区分

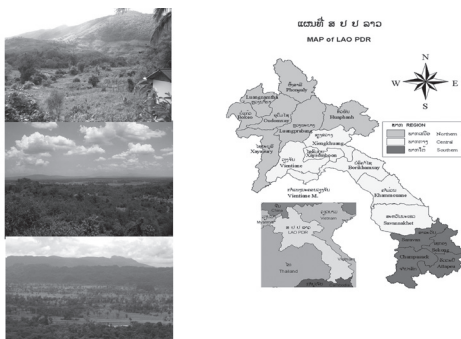


表3 ラオスの作物生産量と作付面積(2017年)

地域	作付面積 (ha)	生産量 (Ton)
北部	366,995	3,460,825
中部	191,690	2,705,480
南部	238,645	2,881,470
合計	797,330	9,047,775

資料:農業局,2017

表4 コメの作付面積と生産量(2017年)



地域	作付面積 (ha)	生産量 (Ton)
北部	206,326	732,266
中部	507,381	2,279,572
南部	242,428	1,027,943
合計	956,135	4,039,780

資料:農業局, 2017

表5 トウモロコシの作付面積と生産量(2017年)



地域	作付面積 (ha)	生産量 (Ton)
北部	140,880	762,825
中部	30,050	157,870
南部	5,200	35,005
合計	176,130	955,700

資料:農業局, 2017

表6 キャッサバの作付面積と生産量(2017年)



地域	作付面積 (ha)	生産量 (Ton)
北部	20,820	663,370
中部	20,515	473,150
南部	29,595	1,140,530
合計	70,930	2,277,050

資料:農業局, 2017

表7 コーヒーの作付面積と生産量(2017年)



地域	作付面積 (ha)	生産量 (Ton)
北部	3,150	4,130
中部	370	675
南部	77,370	145,990
合計	80,890	150,795

資料:農業局, 2017

イドにみられるように、米栽培の写真ではいつも背景は山です。

表5は、トウモロコシの作付面積と生産量を示したものです。表6は、キャッサバの作付面積と生産量を示したものです。表7は、コーヒーの作付面積と生産量を示したものです。ラオスにはコーヒー工場が1つあります。写真は、コーヒーの豆です。皆さまは見たことがありますか。これは、生のコーヒーの豆です。この豆から種だけとって、コーヒーをつくっています。

次にラオスの政府が取り組んでいる、クリーン・アグリカルチャー、すなわち、きれいな農業について述べてみたいと思います。ラオスでは、クリーンポリシーという考え方が支配的です。多くのラオス人は、ラオスは農業生産に適した土地も少ないし、人口も少ないので、ベトナムやタイのように、農産物をたくさん大量に作って輸出するのは無理だと考えています。それでは、どうすればいいか。大量ではなくて少ない量だが、品質と安全性が高い農業を目指そうと考えています。そのために、二つの栽培基準で、農業生産に取り組んでいます。それが有機栽培のオーガニックとGAPです。先程私が言ったように、GAPというのは、化学肥料や農薬を使うことは可能です。ただし、使う量は決まっています。それは言うまでもなく、安全性が確保される範囲内ということです。

この写真は、ラオス政府が定めた有機栽培のための法律みたいなものです。ラオス政府は、いろいろな有機の認定のためのハンドブックつくっています。誰かが、認定されたオー



ガニックマークを使いたい場合には、このガイドラインに沿って認定を受けなければなりません。さらに、Internal Control System(ICS)と呼ばれる有機栽培グループがあって、彼らは自分たちで互いにチェックするんです。こうしたグループにも、基準がつくられています。

この写真は、GAPの認証基準を示したものです。ラオスのGAPは完全にASEANのGAPと同じです。「ASEAN・GAP」には4種類があります。1つは生産安全基準。2つ目は、生産品質基準。3つ目は労働に関する基準です。すなわち、生産と品質だけでなく、労働者、つまりつくる人までケアすることが必要です。

この写真は、ラオスのオーガニック認定マークと有機栽培認定のマークです。誰か、GAPや有機栽培の基準(スタンダード)をとれば、こういうマーク使うことができます。

このような取り組みは、最近始まったばかりだから、利用はまだ少なく、OA認定面積はまだ3,000haしかないです。認定された3,000ヘクタールのうち、ほとんどは野菜栽培です。しかし、お米だったら3,000ヘクタールは少ない面積ですけど、野菜栽培という点を考えると、3,000ヘクタールはすごく大きい面積です。GAPのデータによれば、年平均OA生産量は約2,600トンです。

このスライドは、GAPのデータです。GAPの取り組み農家は300戸で、認定面積は1,200ヘクタールです。年平均生産量は2,658万トンです。このスライドは、認定生産物です。認定されれば、このマークが使えます。これは有機栽培のマークで、これは米です。実はラオスのお米はとても多くの種類があります。15,000種類以上あります。お米の種類は、世界で2番目です。1番はインドです。平地で栽培するお米は種類は少ないですから、お米の種類が多いのは大体山のお米ですね。

この写真は、私の所属する事務所が管理しているGAP作物生産畑と、次は日本から支援してもらったJICAプロジェクトで、クリーン農業をやっているところです。次はGAPに取り組んでいる会社についてですが、認定された会社はこういう認定証をもらえます。認定証をもらったなら、この写真のようなマークが使えます。次の写真は、オーガニック・マーケットです。

次のスライドは、2020年の生産量の目標を示したものです。お米は470万トン、トウモロコシは30.4万トン、コーヒーは12万トンなどとなっています。GAP・OA取り組み農家は10万戸を目標にしています。

ラオスは、作物部門の発展については、2025年までに向かって、ほかにも、20年、30年のビジョンがあります。このビジョンの内容のほとんどは、クリーン農業に関するものです。大体ラオスではクリーン農業といえば、GAPとオーガニックだけです。これからは、普通の栽培はあんまり商品にならないです。

さらに、ASEANに関してはGAPとオーガニックのスタンダード、あるいはGAPとオーガニックの基準について、それぞれの国で基準が違います。例えば日本だったら、基準レベルは高く、世界一くらいですね。しかし、ラオスと他のASEAN諸国には、少し基準の差があります。例えば、ASEAN基準で10個ですけど、ラオスは8個です。しかし、来

年までにはラオスとASEANの国はすべてGAPとオーガニックのスタンダードは平等になります。それは、ASEANの中の10カ国は、もし、GAPマーク、あるいは有機栽培マークをつけることができれば、ASEAN内で自由に作物を移動させることができるということの意味します。逆に、マークがなければ、自由に商売できないのです。

最後に、この写真はすべてラオスです。それでは以上で、私の報告を終わります。ありがとうございました。

**坂田** パンダラさん、どうもありがとうございました。予定よりも早く終わっていただきましたので、最後の写真に関してちょっと補足しておきますと、実は、ラオスは今年五十年ぶりの大水害に見舞われました。私、実は8月24日から30日までラオスを訪問していたんですが、私が滞在している間にメコン川という大きな国際河川があるんですが、その川の水が、もうあと40~50センチ増水すると氾濫するところを調べて調査に行ったんです。帰ってから4~5日してパンダラさんからLINEが来まして、その写真を見てびっくりしました。私たちが通った国道が、ついにメコン川が氾濫して浸水した写真でした。この大水害で、特に農業が非常に打撃を受けました。パンダラさんの報告の中にありましたように、GAP農業、つまり国際認証基準に合致した安全な、安心な農業づくり、それから有機農業づくりを一生懸命支援されているんですが、そのグループの畑や田んぼが大きなダメージを受けたということで、パンダラさんは、とても忙しい日々を送っておられたそうです。土日も副大臣とか大臣と一緒に視察をして回って、私も本当に日本に来ていただけるのかなとちょっと心配していたんですが、幸い雨も最近になって上がって、メコン川の水位も下がり、現在は一応復興過程にあるということで安心しております。ただし、食料不足になるほどではないが、今年は食糧生産がかなり落ちるんじゃないかといわれています。恐らくこれから、また復興と言いますか、農業を立て直す非常に大変な日々が続く、現場の指導が大変だとは思いますが、今日はほんとに貴重な時間を割いて日本に来ていただきました。どうもありがとうございました。

## ラオス農業の発展の可能性

瀬尾 充

元ラオス農林省農業政策アドバイザー

**坂田** 続きまして、先ほどの報告の中でも触れられましたが、JICAという発展途上国の技術支援などを主に行っている日本の政府機関がありますが、そのJICAの専門委員として、そしてラオス農林省の政策アドバイザーとして3年間ラオスに滞在しておられました瀬尾さんにこれからラオスの農業について、もう少し詳しくお話をさせていただこうと思います。瀬尾さんは、本来の所属は日本の農林水産省で、最初は2年間行ってこいということでラオスに行ったが、ラオスがあまりにも魅力的で、ついに帰るのが嫌になって滞在を

1年延ばしてもらったと言われるぐらいラオスが好きな方だとお聞きしております。実は私もラオスにはまっている一人ですが、瀬尾さんから、もう少し具体的なラオスの現状と課題についてお話をしていただけたと思います。それでは、よろしくお願いたします。



瀬尾 充氏

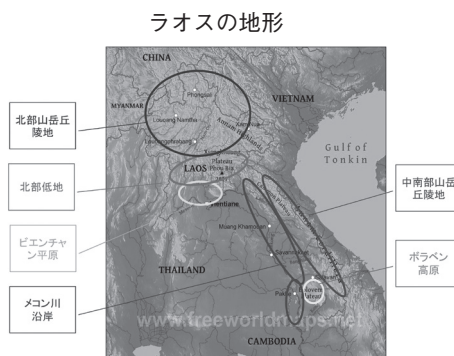
**瀬尾** ご紹介にあずかりました瀬尾と申します。現在また農林水産省に戻って働いております。おっしゃった通り、最初は2年のつもりだったのですが、私も希望しておりましたし、あと、パンパディットさんが勤めておられる農業省のほうからも「残ってもいいよ」と言われましたので、お言葉に甘えて、1年延長して、都合3年間、農業政策アドバイザーとして働いておりました。

私の仕事は、先ほどもあった有機農業であるとか、灌漑をやるとか、もっとマーケットをつくるとか、そんな具体的な話というよりは、農業全般、農業政策の支援であるとか、あるいは、さっきお話が出たJICAが農業の案件をつくる際のいろいろお手伝いをするとか、あるいは日本の企業さん、研究機関さんのいろいろご相談に応じたり、そんな仕事をしていただけてございます。

今日は農業の発展の可能性ということで、私とその3年間の勤務の中でいろいろ気づきましたことを、これはまだパンパディットさんにもお話をしたことはないのですが、気づいたことをあくまで私の個人的な考えですけど、ちょっとお話をさせていただきたいと思っております。

説明の内容は3部構成になっておりまして、まず、あまりラオスのことをご存じない方が多いと思いますので、農業の概要。先ほどパンパディットさんからありましたが、あまり重ならないようにやりたいと思います。あとは私なりに整理した課題と優位性についてお話をさせていただきます。ただ、一般論だけでは分からないと思いますので、最後にボラベン高原という標高1,000メートル以上の台地状の土地が広がるラオス南部の高地があるのですが、ここでいろいろ商業的な農業をやっておりまして、その事例を紹介して、分かりやすい説明ができたと思います。

まず概要です。ラオスの地図が出てまいりましたけど、大体こんな分類がなされているということです。北のほう、さっきの話にもありましたが、大体山がちな国なのですが、北部は特に山がち。中南部山岳丘陵地、こちら辺も山がちでございます。あとは、そんなに山が急峻(きゅうしゅん)ではないのですが、所々平野が広がる北部低地というのがあって、あと首都があるビエンチャン、ここ



## 農産品の輸出の状況

農産物の輸出額の推移

(単位:1,000米ドル)

順位	2012年		2013年		2014年		2015年		2016年	
	品目	額	品目	額	品目	額	品目	額	品目	額
1	コーヒー(生豆)	63,259	コーヒー(生豆)	72,589	天然ゴム	67,265	天然ゴム	63,135	天然ゴム	86,815
2	とうもろこし	27,251	とうもろこし	42,590	コーヒー(生豆)	54,767	コーヒー(生豆)	56,089	キャッサバ(乾燥)	50,373
3	動植物由来の原料	12,911	動植物由来の原料	4,894	たばこ製品	37,657	とうもろこし	53,191	コーヒー(生豆)	49,201
4	果実(生鮮)	3,821	果実(生鮮)	4,411	とうもろこし	32,178	キャッサバ(乾燥)	28,506	とうもろこし	49,054
5	バナナ	2,922	バナナ	3,106	粗糖	24,313	コメ	26,800	コメ	28,368
6	果実(加工)	1,479	ビール	1,672	たばこ(未加工)	17,841	紙巻きたばこ	14,251	粗糖	26,353
7	ビール	1,170	ごま	1,328	紙巻きたばこ	14,258	キャベツ・その他のアブラナ科植物	11,918	ビール	13,548
8	ごま	965	果実(加工)	1,311	キャッサバ(乾燥)	14,176	粗糖	11,575	キャベツ・その他のアブラナ科植物	13,276
9	大豆	94	大豆	94	コメ	10,107	ビール	11,445	紙巻きたばこ	11,156
10	柿	24	果実(乾燥)	38	キャベツ・その他のアブラナ科植物	8,612	シリアル	10,429	でん粉作物の粉	8,519

出典:FAOSTAT

- ◇コーヒーが依然主要輸出品。
- ◇その他の商品作物(とうもろこし(ほぼ飼料用)、キャッサバ(でん粉製造用)、天然ゴムなどは市況に応じて輸出(生産)が増減する傾向。
- ◇これら商品作物の多くは加工度の低い形で輸出。
- ◇近年、政府が販売用・輸出用の生産に力を入れているコメも上位に。

は比較的まとまった平地があるというところ。あとは、ここにずっとメコン川が流れておりますので、このメコン川沿いは、比較的大きな平地が広がっていると。あと、先ほど第3部でお話をさせていただいたボラベン高原、南のほうにボツンと台地状の土地があるというような状況になっております。

まず、いきなり貿易の統計をお見せするのですが、どうしてかと言うと、貿易を見ると、大体その国の農業がどんな様子なのか分かると思って、これを最初に持ってきたのです。一番最近の使えるデータを見ますと、2016年、輸出額トップは天然ゴムでございます。続いてキャッサバ、コーヒー、先ほど出てまいりましたトウモロコシという順番。2014年まで米というのが出てこないのですが、去年から米というのが出てきました。これまで米というのは、自分たちで食べるためにつくっていたという意味合いが強かったんですが、最近自分のところで食べる分は賄えるようになったので、米の輸出のほうも出てきております。あと、ビールですね。ラオスはおいしいビールがありますので。こんな状況になっております。総じて一次産品、農産物がそのまま輸出されているというものが多数を占めております。

一方で、これはラオスへの輸入の統計でございます。同じ5年間を取っております。私もこれは統計を見て知ったんですが、一番が鶏肉となっております。ラオス人は鶏肉をよく食べます。あと、米も実は輸入しているんですね。このあと続くのは、比較的加工されたものが多いという状況です。鶏肉というのは恐らく、需要、消費に対してまだ供給が追いついてない状況ということで、多分タイ、ベトナム辺りから輸入されているということだと思います。あと、米。輸出していて、輸入しているというのは、何か矛盾しているように思われるかもしれませんが、ラオスの米というのは9割方、もち米なんですね。いわゆるタイとかインドで食べられている長粒種で、しかももち米っていうのが大体9割ぐらいです。なので、恐らくこの輸入されている米っていうのは、われわれが普通食べているう

## 農産品の輸入の状況

農産物の輸入額の推移

(単位:1,000米ドル)

順位	2012年		2013年		2014年		2015年		2016年	
	品目	額	品目	額	品目	額	品目	額	品目	額
1	ノンアルコール飲料	85,640	調製食品	67,152	鶏肉	137,209	鶏肉	95,833	鶏肉	127,343
2	調製食品	55,355	ノンアルコール飲料	57,718	調製食品	67,865	コメ	77,790	コメ	85,386
3	食品のかす (飼料原料等)	36,590	食品のかす (飼料原料等)	41,154	ノンアルコール飲料	62,480	調製食品	67,800	ノンアルコール飲料	75,923
4	蒸留酒	30,204	コーヒー及びその抽出物	28,716	食品のかす (飼料原料等)	46,397	ノンアルコール飲料	64,927	調製食品	75,153
5	コーヒー及びその抽出物	22,484	たばこ製品	21,721	牛肉	27,662	食品のかす (飼料原料等)	45,431	精製糖	56,148
6	天然ゴム (乾燥)	13,983	蒸留酒	17,585	コーヒー及びその抽出物	25,983	精製糖	40,643	食品のかす (飼料原料等)	44,327
7	たばこ製品	13,203	天然ゴム (乾燥)	16,566	天然ゴム (乾燥)	20,246	牛肉	34,533	コーヒー及びその抽出物	34,641
8	砂糖菓子	11,549	精製糖	16,334	たばこ製品	17,676	コーヒー及びその抽出物	24,735	パン・パストリー	21,438
9	パン・パストリー	10,507	幼児用食品	13,814	蒸留酒	16,693	たばこ製品	23,655	たばこ (未加工)	15,721
10	シリアル	10,092	パン・パストリー	11,832	精製糖	15,726	パン・パストリー	17,387	蒸留酒	14,373

出典:FAOSTAT

- ✧国内生産による供給が不十分なもの(鶏肉など)。
- ✧加工度の高い産品(調製食品、精製糖等)の輸入も多い。
- ✧コメ(うるち米が中心)も輸入。

うるち米の、もっとパラパラしているほうだと考えられます。そういったものは、なかなかラオスではいい品質のものが手に入りませんので、輸入している、多分こういうことだと思うんです。総じて言えるのは、やはり加工度の高いものは輸入に頼っているという状況です。

ここから、農業生産の概要。先ほどもちょっと話がありましたが、簡単にご説明します。やっぱり何と言っても、お米が一番で、次いでトウモロコシ、野菜、コーヒーと、こんな順番になっております。ラオスの統計というのは日本と違って、実際に畑に行って収穫して量ってという、そういう実測には基づいておりませんで、県、郡、村と「統計を出さない」という通知が下りてきて、村長さんが、あるいは農業のリーダーが、大体こんなもんだらうというので報告して積み上がっていく数字なので、正確とはなかなか言えないの

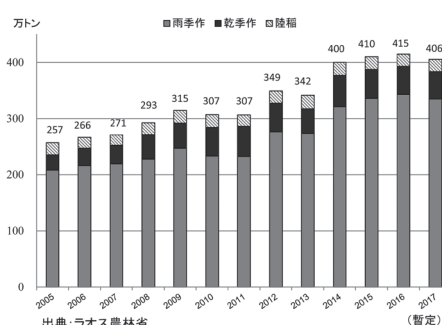
## ラオスの農業生産

農作物の作付面積(2017年)

順位	作物名	作付面積 (ha)
1	コメ	995,215
2	とうもろこし	207,190
3	野菜	162,880
4	コーヒー	93,305
5	でん粉作物	81,985
6	はとむぎ	76,810
7	果樹	75,725
8	さとうきび	29,090
9	豆類	27,807
10	カルダモン	21,637

出典:ラオス農林省

コメの生産量の推移



出典:ラオス農林省

(暫定)

- ✧ラオスの主要農作物はコメ。
- ✧とうもろこし、コーヒーなど輸出産品も上位に。
- ✧コメの生産は近年やや停滞?

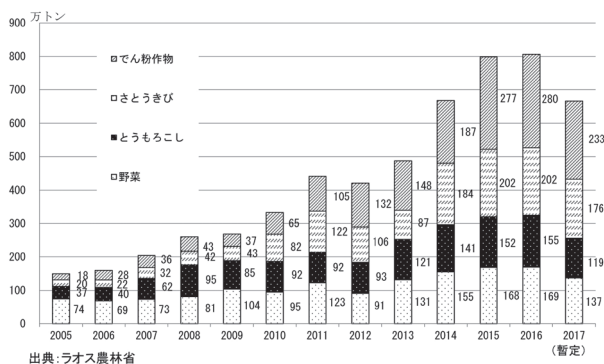
ですが。なので、絶対量についてはちょっと、クエスチョンマークが付くのですが、ただ、トレンドとしてはある程度信頼できるものではないかと思えます。ということで、2005年から取っていますが、一貫して上昇傾向にはあると。そういうことで輸出にもお米が回るようになってきているという状況だと思います。3つのパターンに分かれていますけど、一番下のこのグレーが、雨季作です。やはりラオスはまだ雨に頼る稲作が多いので、雨季作がほとんどです。あとは、この黒が乾季作。雨が降らないとき、灌漑を使ってやる農業です。一番上が北部、山のほうで焼き畑のサイクルの一環で行われるような陸稲、オカボですね。そういったところのお米がこれだけと、こんな状況でございます。

自分たちが食べる以外に最近商品作物と言われるものも生産が増えております。デンプン作物、これは端的に言えばキャッサバ、それからトウモロコシ、サトウキビですね。トウモロコシはほとんどが飼料用、豚とか鶏の飼料用です。あとは野菜。これも生産が増えてきているところです。2017年がちょっと減っているのですが、これはまだ暫定で確定してない値なので理由は分からないのですが、さっきパンパディットさんに聞いたら、去年の気候が悪かったので、洪水などの影響が出ているのではないかということです。でも、全般として増えているというトレンドであります。

畜産はきれいに家禽(かきん)、ニワトリとかアヒル、それから豚、牛も増えているという状況ですね。まだ、ラオスは水牛というのが結構たくさんいまして、田畑での労働作業に使うとともに、お肉としても食べています。水牛は微増というところですが、この棒グラフのように鶏や、一番上の豚の消費が伸びていて、タイの大手資本、ラオスの資本もありますが、そういうところはかなり企業的に畜産をやっていますので、かなり急激に伸びているという状況でございます。

あと、魚ですが、先ほど話がありました、ラオスには海がありませんので、これは全部淡水魚です。川とか沼とか、養殖の池で育てられた魚です。最近、やはり養殖の割合が多くなっていますね。養殖の魚が7割ぐらゐを占めていまして、捕獲業ですね。網を投

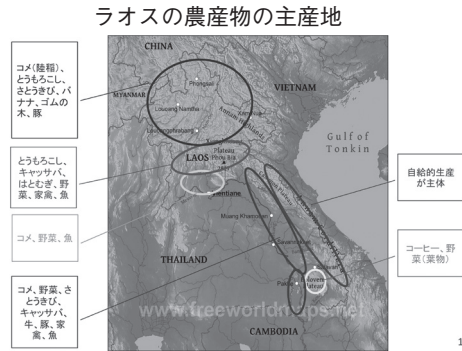
商品作物の生産の推移



❖商品作物の生産は増加傾向。

げて、川で獲ったりするやり方、それがだんだん減ってきている。あと、政府としても天然資源の保護を打ち出してきていますので、その辺で規制もかかっているという状況で、今後養殖業が増えるというトレンドは変わらないと思います。

これがこれまでご説明した統計データを合わせて、地域別にこんなものがつくられていますよというものを表してみました。お米は、もう大体この辺ですね。平野部、ピエンチャンのまわり、メコン川の周辺。で、その周辺部は、商品作物が結構盛んにつくられていると。あと、後ほど説明しますが、ボラベン高原でコーヒーとか野菜がつけられていると、こんなパターンでございます。



農業の状況ですが、肥料の利用者というのもまだ、化学肥料・有機肥料を合わせても、ちょっとデータが2010年で古いのですが、まだ50%強というような状況でございます。農薬の利用者に至っては、まだまだこの2010年時点で、20%以下ということで、こういった状況がある面逆手に取って、ラオス農業省がクリーンな農業を進めようとしているわけでございます。あと、機械の使用割合ですが、二輪トラクター、最後のページに子供がトラクターに乗っている写真があるのですが、二輪トラクターは結構普及しているのですが、ほかのものはまだ全然普及してないという状況です。まだ、人力に頼った農業というのがほとんどというのがお分かりいただけると思います。

灌漑ですが、先ほど乾季の稲作が少なかったというデータがありました。灌漑のセクションに「農業省で一番予算を使っているのに何で増えないのか？」と聞いても、あまりよく分からないのです。思うに、1つは、新しいのをつくっても、どんどん老朽化しているものがあって、その結果増えないであるとか、あるいは、いろいろな取り巻く環境の変化、即ち、ほかの経済活動とかが増えてきて、あえて灌漑をしてまでも二期作、乾季と雨季とに農業やろうとする人がいないという、そういうことで、意外に灌漑面積が増えてないということではないかと考えているのです。

あと、これがもう1つ考慮しなければいけないラオスの状況なのですが、栄養の状態ですね。全体として野菜生産であるとか、お米の生産が増えてきて、お米に至っては、自給率ほぼ100%を達成しております。ただ、この発育障害児というのは、身長の高い子供ですね。その年齢層の身長の平均から2標準偏差よりも低い身長の子供の割合でございます。2011年のころよりは改善はしているの

ラオスにおける栄養の状況

◆ 5歳未満の発育障害児の割合

順位	県名	2015* (%)	2011/12** (%)
	全国	36	44
1	ウドムサイ	54	55
2	ボンサリー	51	61
3	フアパン	48	61
4	セコン	46	63
5	ルアンパバーン	45	46
6	サイソンブン	44	no data
7	サラワン	44	54

□ 低栄養    ■ 中栄養    ▨ 高栄養

出典 \* 2015 Lao Child Anthropometric Assessment Survey, \*\* Lao Social Indicator Survey 2011/12 (単位は2015年時点。なお、2012年における6歳未満の発育障害児の割合は全国) (354頁、3)

◆ 発育障害児の割合は全般的に改善されたが、まだ比較的高い水準。  
◆ 大きく改善した県もあるが、そうでない県も。

すが、まだ県別に見ると、半分以上の5歳以下の子供の身長が低いという状況でございます。改善しているところもあれば、あまり改善していないところもあるという状況です。この白いところは、北部の県ですが、山がちで、発育阻害児が多くなるという傾向もあります。南部のセコンも山がちな県ですので、そういったところですね。全国平均でも、まだ36%の子供が発育阻害児という状況です。ちなみにタイは、10%台まで低くなっているという状況です。

以上これまでご説明したことをまとめると、生産は概ね増加、商業的農業も進展、貿易も活発化、インフラの改善や農業の近代化にはまだまだ余地がある、まだ原料供給型であり、加工産業が育っていない、あとは、栄養状態の改善がいまだに重要な課題という、総論的に言えばそういう状況でございます。

ここからは、私なりにまとめたラオスの農業の課題と優位性です。いろいろなものを見て、いろいろなところで聞いたりして、言われている問題というのはこういうものです。農家組織の育成ですね。さきほど、有機農業のグループの話がありましたが、日本でいうところの農業協同組合ですが、ラオスにも協同組合法というのがある、法人格を持った農業協同組合というのをつくれるんですが、その数は、まだ全国で8ぐらいしかないんです。ということは、まだまだ法人として農業をやっているところは少ない、と。これにはいろいろな理由があるそうなのですが、1つの理由は、税金を払ったり、組合費を払ったりしてまで、グループとして活動することにメリットを農家は感じてないとかですね。あとは昔、集団農場ですね。中国でも人民公社がありましたが、それと同じようなものがかつてラオスにもありまして、やっぱり悪平等の問題が起りまして、いくら働いても、いくらさぼっても取り分は同じという状況があって、それに懲りて、特に古い世代の人は、そういうグループ農業の名前と今の農業協同組合がラオス語で同じなので悪いイメージを持っているようなのです。サハコーンという単語です。だから、サハコーンはもうまっぴらだという感じで、組織をつくらうとしないという人もいると聞いています。あとは加工技術のところ、まだ改善の余地があります。まだ農業資材、肥料、農薬であるとか、あとはビニールハウス、そのような資材の産業は育っておりません。これらのものはまだほとんど輸入に依存しております。ラオスはこの辺はもうかなり思い切っておりまして、肥料とか農薬とか、あとはそういう資材、農業機械の輸入には関税がかからない。あるいは、物品税が減免されている。そういったことで、外に頼るということを明確に打ち出しているということです。でも、まだまだ足りない。それから、何かビジネスをやりたい、広げたいというときに使える資金がない。これはいろいろなところで聞きます。あとは市場。どうやって売ったらいいのかが分からないという人がたくさんいます。あとは流通。このことについてはインフラとか、いろいろな手続き面でまだ改善の余地があります。これが一般的に言われている問題です。

私もJICAの専門家ですから、いろいろなドナーが集まる場所に行き、会議に出るのですが、そういうところで議論されているラオスの農業の問題について私なりにまとめたのがこうです。まずは付加価値が低い農業生産。まだ原料をつくるだけにとどまってい



ると。あとは、農薬の不法使用。ラオスも周辺国からの投資、中国やベトナム、タイ等々から農業分野のプランテーションなどへの投資が増えていますが、そういうところで違法に農薬が使われていたり、化学肥料が必要以上に使われている。それは企業の側にも問題があるのですが、ラオスの農家のほうも、使い方が分からないうちに使っていたりすることもあるんですね。そういうものが非常に大きな問題になったケースがバナナ農園のケースであります。あとは、日本はいろいろな災害に見舞われていますが、ラオスでも同様に自然災害、バツが大発生しているとか、あとは先程も話がありましたが、雨が降り続いたり、嵐がやってきたり、気候が極端化する傾向があります。このことに関して、気候変動への対応、もっと強靱な農業をつくりあげていかなければいけないということが課題になっています。あとは契約農業。申し上げたとおり、いろいろな企業が入ってきて、お金もうけのための農業をしようと動いていますが、ラオスの農家の多くの方はまだ商売としての農業の経験が浅いため、契約書を読んでもよく分からないのです。ですから、よく見ないでサインをするというような状況になっています。ということで、このことに関連していろいろな問題が出てきています。あとは、栄養改善。これは先ほど申し上げたとおりです。それにはいろいろな理由があります。昔は大きな面積を使って長いサイクルでうまく焼き畑をやっていたのですが、人口が増えてそういうことができなくなって、今は焼畑を禁止する、規制するという方向になっています。それで、自分たちの生業がうまく回らなくなった人がいるわけですね。あとは、開発や土地政策で移住を余儀なくされた人が貧困に陥っているようなケースもあります。あとは、伝統的な栄養摂取の仕方に問題があるとか。それから、商品作物、天然ゴムの木の栽培が増えていますが、それらを植えても、自分たちが食べられない場合もあります。そういう換金作物に集中するあまり、自分たちの身の回りで手に入る食べ物が少なくなっているという問題も起きております。

あと、そのような中で、今回のシンポジウムのテーマですが、ラオスにどのような活路があるのかということをおなりに考えてみたのですが、1つはやはり、先ほどから話が出ている安全、環境に配慮した農産物の生産ではないかと思えます。幸いなことに、まだラオスでは農薬や化学肥料に汚染された農地が比較的少ないので、これを生かしていくということ。ベトナム、タイの人にとっても、ラオス産というのは、何か安全性の面でまだいいイメージがあるそうなのです。その手段として、有機農業や、先ほど話があった、ちゃんと生産工程を管理して安全性を確保する農業、GAPをやっていくとか、いわゆるクリーン農業をやっていくということ。もう1つは、まだラオスは大規模に農業に投資する動きがまだ限られています。逆に言うと日本だったら、いつか問題になりましたが、収穫されるコメのほとんどコシヒカリやコシヒカリの親戚みたいなお米になってしまったり、トマトも、一定の種苗会社がつくったものがかなり出回っているということがありますが、ラオスではまだ、多様な作物品種や伝統的な家畜の系統などが残っていますので、その中には幾つかの企業さんも目を付けていらっしゃると思いますが、有用な植物、動物資源があるのです。そういったものを活用していくということです。実際に、ベトナムの人などには「ラオス産のハーブはとても香りが良いから、ラオス産のを買うんだ」とか、「ラオスの黒

豚はおいしいんだ」とか言う人もいるわけです。こういうのをうまく活用すればブランド化できるのではないかと思います。私もパンパディットさんのお考えと同様に、タイやベトナムのお米みたいに大規模に商売をやって勝つということは難しいのではないかと思いますので、こういったところでやっぱり勝負をしていくしかないのではないかと考えています。「これしかない」というのは言い過ぎですが、1つの活路ではないかと思っています。次に、ラオスには土地そのものはまだありますし、あとは灌漑をすればまだまだ生産量は量的には増やせるとか、生産性も増やせる。あとは、きれいで豊富な水。水の衛生面のことに課題がないわけではありませんが、私は比較的きれいな水が手に入りやすいのではないかなと思っています。あとは、安定した電力。これは地域にもよるのですが、これも相対的に見てラオスの強みではないかと思っています。あとは、これは自分にとっては面白いのですが、伝統的な昔の知恵がまだラオスには随所に生きている。ラオスの人って、多分パンパディットさんもそうだと思うのですが、庭にいろいろな植物を植えているのですが、大体それらは生薬というのか、お薬になって、「おなか痛いときは、この葉っぱを食べよう」というようなことをやっているのです。そういう伝統的な知恵が普通の生活の中でまだ生きている。その中に実は有用なものもあつたりするのではないかと目を付けている企業さんもあるのです。

ということで、ここまで一般論だけをお話ししました。先ほど言いました南のほうにあるボラベン高原ですが、ここはラオスの中でも将来、農業を軸に発展が見込まれているところということで着目されているエリアなのですね。

先ほど大きな地図をご覧くださいましたが、パクセーという南の大きな都市がここにあって、そこから車で1時間ぐらいの辺がボラベン高原です。標高は高いところで1,300メートルぐらいです。ラオス全体の年間の降水量が大体1,500~1,600mmぐらいなのですが、ここは雨が多くて、3,000mm以上あるということです。日本が1,500mmぐらいですから、かなり多い。

先程、ラオスに農地はたくさんあるといいましたが、肥沃なところは意外に少ないのです。しかし、ボラベン高原には肥沃な土地が比較的多いということです。あとはパクセーという商業都市が近くにあります。他に、近いとまでは言えないのですが、大きな道路が走っていて、タイ、バンコクまでは大阪から福島市ぐらいの距離、ダナンというベトナムの中南部の比較的大きな港までは、静岡ぐらいの距離にあります。また、プノンペンまでも陸路で行ける。早ければ1日ぐらいで、バンコクまで車で行けるらしいのですが、2日ぐらいでバンコクには物が運べるという状況のようです。

この辺りにボラベン高原があるのですが、インドシナ半島の真ん中であって、ここから荷をバンコクまで運べるのです。それで、こちらのダナンのほうにも運べると。ハノイまでは距離があるのですが、あと、プノンペンはこちら。こういう位置関係です。

いくつかボラベン高原で農業ビジネスをやっているところを、その状況はどうかということを知るために視察してまいりました。まず、これは日本の漢方薬メーカーさんなのですが、ラオスに出て来られて、2県3つの郡に7つの農場を持たれて、漢方薬の原料を

生産されています。この会社さん、原料の調達先が日本、中国、ラオスということです。そのうち80%ぐらいが中国、15%が日本産、あと5%がラオスということです。ラオスに來られた理由は、原料供給の多様化ということだそうです。中国産の原料については、出所不明な場合があって、履歴をたどりきれないケースがあるとのこと。きちんとどこでつくられて、どこを通過してきたという、いわゆるトレーサビリティが確保された原料調達を広げたいということでラオスに來られたということです。あとは、現地にいろいろとうまく溶け込めるように、中学校を建設されております。こういったところがあります。

これはタイ系の会社ですが、オレンジ、パパイヤ、グアバなどをつくっている果樹農園でございます。生産された果実の7割をタイのチェンマイに運んで、3割は国内で販売しているとのこと。ただ、聞くところによりますと、グレードの高いものはタイに持って行って、グレードの低いものを国内で売っているという状況だそうです。自分たちが持っている冷蔵機能付きのトラックで運んでいるというような状況です。

次に、こういうビジネスもあるのかと思ったのですが、タイの種の会社です。ボラベン高原で温帯作物のズッキーニ、トマト、キュウリ、カボチャなどの種をつくられているということです。この会社さんも実は、野菜そのものを作っていたのですが、それでは、採算が取れないということで、種のビジネスに切り替えたということらしいのです。ボラベン高原には標高が低いところから高いところまでありますので、日本でつくったりすると、ある一定の季節しか種が取れないものが、ここだと年を通して取れるということらしいのです。そういうことで、温帯作物の種苗の生産、有機種子の生産等をやって、アメリカ、EUなどに輸出しているということです。

あとはコーヒーですね。ボラベン高原には大規模なコーヒー園もあるのですが、これは小規模な生産者が集まった協同組合です。先ほど申し上げた8つある組合の1つですが、組合でやっているコーヒー生産です。ここにはアメリカからNGOのコーヒーの専門家が入って、スペシャルティコーヒー、かなり品質の高いコーヒーをつくって、日本にも輸出をしております。

あと、これは日本の方が経営されているところで、いちご農園です。いちごはラオスではあまり一般的な果物ではありませんので、いちごを生産して、ビエンチャンなどに運んで販売するとともに、客に農園に入ってもらって、そこでいちご狩りができるようにしています。私も農業省の職員さんと一緒に行ったのですが、みんな大喜びで、おなかを壊すぐらいいちごを食べる人もいました。それと一緒に観光農園も併設しています。あと、今実際にやられているかどうか分かりませんが、今後はそばも栽培して、そば打ちなどもやりたいと経営者の方はおっしゃっていました。

それから、これはちょっと農業じゃないのですが、先ほど申し上げた、近くのパクセーというところに、日本の中小企業専用の経済特区というのをつくっております。あとでこれに関する話をお話しますが、なぜ中小企業なのかというと、大きな経済特区、即ち工場用地をつくってしまうと、人材の奪い合いが生じて地域に問題を起こすということで、中小企業専用としたということです。

今、この経済特区の中にいくつかの日本の企業が入っています。表のこちらは進出の形態です。これは会社さんから聞き取った内容ですが、大体はほかにもメインの工場、マザー工場があって、プラスワンという形でラオスに進出してこられたという会社さんが多いということです。

視察から分かった課題についてですが、今、ご紹介した企業さん、商売としては実は調子が良いわけではないと、皆さんおっしゃっていました。やはり生鮮野菜はあんまりもうからないということだと思います。いくらラオスの野菜がフレッシュで味がいいといっても、それだけに頼っていてもなかなかもうかる商売にはならない。あとは、やはり労働力が問題ということです。これについては管理職の問題もあります。私が行った農場も、マネージャークラスは、タイ人や中国人というケースが多かったのです。あと、物流コストは申し上げたとおり、やはり輸送距離が長い。加えて、鉄道もありませんし、港もありません。それから、資材コスト、ほとんど輸入に頼っていますので、やっぱりどうしても高くなってしまいます。あとはセクター間の連携。国として農業を主要産業として発展させるということなのであれば、いろいろな分野、インフラであるとか、金融であるとか、連携してそのようにすればいいのですが。例えば、先ほど触れましたボラベン高原は、農業の発展にとっても可能性があるのですが、一方で鉱物やエネルギー分野でも開発の対象となっています。ボーキサイトなどの鉱物の採掘の権益が、高原のかなり大きな範囲をカバーしていて、将来そこでいくら農業をやっても、鉱物の採掘のために開発されてしまうというリスクもあるのですね。あとは、せっかく滝があってきれいな場所があるのに、その滝が見えるすぐ脇に水力発電所がつくられていたりするなど、本当にセクター間で連携しているのかというようなことがよく見られるわけです。

このような状況の中で見えた発展の可能性というのは、台地という冷涼な気候を活かして、周辺の地域ではあんまりつくられない、今でもそこではキャベツ、白菜や、高原野菜をつくっていますけど、トマトや、先ほど申し上げた温帯性の種子など、特異的なものをつくれるということがあると思うのですね。このような環境は、近くではほかにはベトナムのダラットぐらいしかないのですね。あとは、これは誰か視察でお会いした方がおっしゃっていたのですが、標高が1,000メートル級でこれほど広くなだらかな地形があるところというのは、そんなにはないということだそうで、土地の条件も良いのではないかと思うのです。あとは、美しい景観ですね。これは個人的な考えですが、うまくやればボラベンということで、涼しい、きれいなところでつくられているというイメージを形成できる可能性があるのではないかと思うのです。

そのために何をすればいいのかと。私の農業政策アドバイザーとしての仕事にも関わりますが、やはりボラベン高原は、ラオスの宝物だと思うのですね。これを大切にしなければいけないのですが、鉱山であるとか、観光であるとか、今はなかなか全体を戦略的に持続的な方法で開発されるようなかたちになっていないように見受けられるのです。今、ラオス政府がボラベン高原にある1つの県と協力して、持続的な開発のための計画を策定しているところですが、私もこれは大賛成です。なるべくその1つの県だけではなく、ボ

ラベン高原は3県にまたがっていますので、3県を含めていろいろな利害関係者を巻き込んで、みんなが持続的にここが発展するような計画を立てる、これがまず必要であると思います。このことは今、そういう方向で進んでいます、それをやっていただきたい。あとは、クリーンであること。これはボラベン高原だけじゃなくて、ラオス全体の農業のやはり死活的な問題だと思っていますので、これをきちんと守らないといけない。ということで、まずは規制をきちんと守ること。ただ、言うのは簡単なのですが、なかなか難しくできない。ラオスも、お金も人も限られていますので、そこは、まずは、モデル地域に集中してきちんとやってもらう、お手本をつくるということが大事ではないかと思います。あとは、先ほどお話があった有機農業やGAPを着実に進めていきましょう。そういうことをモデル地域でやっていくと。あとは、単に1次産品、原料産品をつくるだけではなくて、もっと加工して付加価値を付ける形にしていく。食品、ジュースでも何でもいいのですが、そういったものです。あるいは、さっき例があった種苗産業。種というのは、軽くて値段が結構高いものなのですよ。だから、トラックや船ではなくても飛行機で運べるわけですね。だから、そういった付加価値が付くものに対しての支援をしていくと。ボラベン高原でなくてもいいのですが、先ほどの経済特区などにそういったことに関連した企業を呼び込むというような努力を積極的にやったらどうかと思っております。あとは、とはいっても、生産の単位はそれぞれの農家グループですので、日本と同様で、ラオスも個々の農家というのは小規模ですから、そこはグループを組んでやっていかなくてはいけません。組織化をきちんと進めていく、これも力を入れていかなければいけないことではないかと思えます。

物流。これも引き続き大きな課題です。あとは申し上げたとおり、管理職・専門的人材の育成ということです。ラオスは一般的に人件費が安いと言われていますが、それは確かにそうなのですが、マネージャークラスの人材を集めようとすると、途端に人件費が上がってしまうのです。ということで、人件費が実は安くつかないという状況があります。現在そういった人材をタイ人、中国人に頼っていますが、それをもう自前で育成すると、これをしっかりやらなければいけないのではないかと思います。

最後に、ラオスの北から南まで、特徴的な農業を写真でご覧いただきたいと思えます。これはルアンナムター県とサイニャブリー。先ほどのパンパディットさんの説明で北部の地域と言われたところで、ルアンナムター県です。ここは中国と国境を接している県で、山がちな土地が多いところです。ここは観光としては少数民族ツアーが有名なのです。伝統的な民族衣装を着た村の人から、民族独特のいろいろな工芸品を買うことができます。ただ、そういうところにあっても、実は背景に写っているのはゴム園なのですね。だから、いくら伝統衣装を着て、伝統的な暮らしを営んでいるように見えても、実際にはそこに住んでいる人達は、ゴム園でゴムの採取をやっている状況です。今はそんな生活に変わってきているようです。特にルアンナムター県では、大きな道路沿いは、かなり多くの山や丘がゴム園に変わっているという状況です。

ちょっと南に下りたサイニャブリーですが、ここも丘陵の地形が多いところです。ここ

は、最近ハトムギの生産が伸びております。日本にも、お茶の原料として運ばれているようです。あとはトムロコシ、先ほど申し上げたオカボ、陸稲ですが、このようなものが栽培されています。これらの作物を市況に応じて変えてつくっているという農業が行われています。

次は、首都ビエンチャンです。そこでは最近有機農業、有機野菜を志向する消費者が増えていますので、有機農業による栽培が結構増えています。写真にある黄色い四角いものは、ハエ取り紙みたいなものなのですが、害虫を作物に寄せつけないようにする工夫です。こういうふうには、日本で見えるような立派な資材ではないのですが、自分たちで木を切って柱などをつくって、ビニールを張って、こういったことをやって、有機農業を積極的にやっているということです。

次は中部にあるカムアン県というところです。先ほどもご説明しましたが、ラオスの人はあまり裏作、二期作をしないのです。ここは水田が終わったら、次は、乾季にはたばこをつくるというような、そういう農業もやっているということです。

次はラオスの米どころ、サバナケット県です。ここは比較的広い低地が広がっています。精米企業が大規模に商業的な米生産を行う取組も進められています。面白いのは田んぼの中に木が立っているのですよね。農作業の合間の休憩用とか、牛とかをつないだりとかする目的でそういうものがあるらしいのです。

次は、先ほどご説明したチャンバサック県のボラベン高原にある大規模な財閥資本のコーヒー農園です。ちなみに、この企業の名前はパクソンハイランドと言うのですが、このコーヒーの7割は日本に輸出されて、コンビニの店頭で売っているコーヒーなどに使われているのだそうです。

ということで、駆け足でご説明しましたが、何かご質問がありましたら、あとでお受けしたいと思います。資料の最後にあるこれが二輪トラクターですね。こういったものは普及しているのです。どうもありがとうございました。

**坂田** 瀬尾さん、どうもありがとうございました。JICAという名前をご存じの方もおられると思いますが、日本の発展途上国への技術支援などを行う機関で専門家を各国に派遣しております。ラオスにも専門家が何人か派遣されていて、主に先ほどから問題になっている有機農業やGAP認定農業への取り組みの支援をされています。実際この農産物がGAPに合致している、あるいは、AOとして認定できるという判定をするには非常に専門的な知識が要るそうです。そういう認定ができるような人材を育成するために、現地で指導されています。あるいは流通やマーケティングなど市場経済化への支援をされている方もおられるそうです。そういう非常に地道な活動を、実は日本の政府が発展途上国の支援のために人材を派遣してやっているということも、ぜひ、皆さん方知っておいてほしいと思います。目立たないんですが、非常に重要な活動をやっているということをご理解いただきたいと思います。

## ラオスにおける経済発展と工業化

ヴィサテップ・スクサバン (Souksavanh VIXATHEP)

兵庫県立大学経済学部准教授

坂田 それでは続きまして、兵庫県立大学のヴィサテップ・スクサバン先生にご報告をお願いいたします。スクサバン先生はラオスのご出身で、ドイツの大学をご卒業になりました。その後、アジア開発銀行にお勤めになったのち、神戸大学の大学院に留学されまして、現在は兵庫県立大学で教鞭をとっておられます。実は、スクサバン先生とは、ベトナムと一緒に行ったことがあるんですが、ベトナム人とスクサバンさんが普通に話しておられるんですね。で、相手のベトナム人は、スクサバンさんをベトナム人だと思って話していたんですね。「この人はラオスの人ですよ」と言ったら、「えっ？」とびっくりしておられました。先生はドイツ語も堪能ですし、ベトナム語はもう現地人が間違うぐらい堪能です。



ヴィサテップ・スクサバン氏

現在大学では、英語で講義をされておられるということです。英語専門の教育を担当されていて、講義もゼミもすべて英語だそうです。卒業論文も英語で書かせるということで、普段は英語を使ってらっしゃいますので、日本語での講演は、ご本人は自信がないとおっしゃったんですが、私は「ぜひ、日本語をお願いします」と無理をお願いいたしました。もし、万一、言葉に詰まったりした場合に備えて、本学の英語の堪能な先生を通訳として控えさせていただきますということで、日本語での報告をお引き受けいただきました。こちらに座っておられるのが、通訳をお願いした本学の松島みどり先生です。時間の都合上、できるだけ通訳が要らないようお願いしたいと願っております。これまで私たちは農業の発展の可能性ということを考えてきたんですが、スクサバン先生は確かに農業も大切ですが、やっぱりラオスは中小企業の発展も考えなければいけないという立場から、少しラオスの中小企業が現在どうなっているか、あるいは、これからどうすべきか、ということを取り上げていただけると聞いています。それでは、先生よろしく申し上げます。

スクサバン 坂田先生、ご紹介ありがとうございます。私は、普段は英語で講義を担当していますが、今日は一生懸命日本語で発表させていただきたいと思います。もし何か間違いがあれば申し訳ありませんが、よろしく申し上げます。

前のお二人のお話は、農業についていろいろな情報を出してもらいましたが、これから農業発展という視点からもう少し広く経済発展について述べてみたいと思います。経済発展を考える場合、ラオスでは農業以外にどのような部門やセクターが発展しないといけないか。それから、ラオスは今、ASEANに加盟していますが、これからすこしアジアにおけるラオスの位置、アジアにおけるラオスの経済的位置について話してみたいと思います。それから、工業化について考える場合にも、様々なセクター・部門がありますが、今

日は縫製業と中小企業について話してみたいと思います。最後に、将来ラオスはどんな道を見つけないといけないか、少しだけ話したいと思います。

ラオスは、ASEANの一員ですが、ASEANはどのような位置にあるかをみておきたいとおもいます。ASEANの周りは、東北は日本、北は中国、西はインド、南はオーストラリアと、経済大国に囲まれています。ASEANは現在10カ国ありますが、東南アジアのよりよい国際協力や協調をもっと増やすように、ASEANは10カ国を実現しました。ASEANは1967年に5カ国で発足しましたが、今年で発足50年が経ちました。ラオスとミャンマー、カンボジア、ベトナムは、1990年代にASEANに加盟した後発加盟国です。これらの後発加盟国は、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムの頭文字のアルファベットをとって、CLMV諸国と呼びます。経済の話についてはASEAN・5やASEAN・6などと呼ばれることが多いと思います。ASEAN・5はインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイを指します。それはASEANの最初からの加盟国で、1984年にブルネイが加盟してからは、ASEAN・6と呼ばれるようになりました。その後、90年代に、CLMVの4つの国が加盟しました。今日は少しCLMVについて話をしたあと、ラオスについて詳しくみていきたいと思います。

CLMVというのは、カンボジアは人口1,500万人ぐらいで、ミャンマーは5,000万人、ベトナムは9,000万人です。CLMVの中でラオスは一番小さい国です。面積は日本の本州ぐらいです。人口は、東京の人口の半分ぐらいで、それらの人々が日本の本州に住んでいるというイメージを想像してください。広い土地に人口はあんまりいない、といった感じです。中国人も多く来ていますが、まだ人口は少ないと思います。

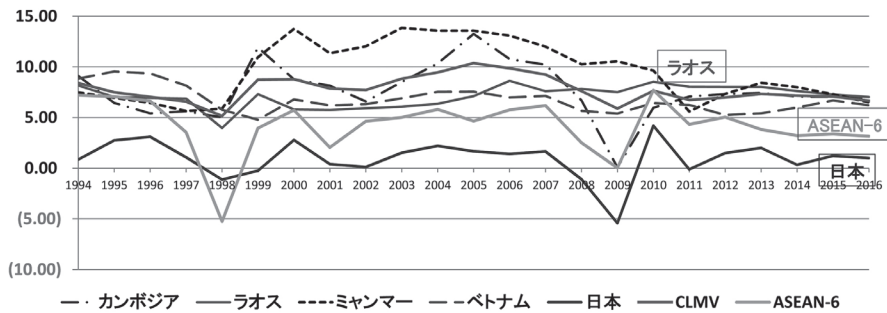
次に、ラオスの経済について少し話したいとおもいます。ラオスは、この20年間に経済が発展してきました。GDPでみた経済成長でいうと、この20年間は本当に急速度で成長しています。これを見るとラオスの経済もよくなっていることが分かりますが、それはどのような内容でしょうか。GDPには、自国の独自の経済活動だけではなくて多分外国の会社の経済活動も含まれています。

それで、これからラオスの経済発展のために何が必要かということについて少し話したいと思います。先程の表にみられるように、ASEAN・6の平均経済成長率は4%で、ラオスは7%です。ASEANの中でも比較的成長率の高い国だという点は注目されていると思います。1人当たりの実質GDPでみると、20年前は年間で462ドル、およそ5,000円ぐらいでしたが、現在は1,730ドルぐらいですから、日本円に換算すると2万円ぐらいでしょうか。これは、実施地GDPですが、名目GDPでは2,457ドルになります。

スライドに示した表は、過去30年間のラオス、CLMV、ASEAN・5の実質GDPの推移を見たものです。30年前のラオスのGDPは約9億ドルで、30年後の2014年は約55億ドルです。この間の経済成長率は、大体7%ぐらいで、ラオスの経済規模はこの間約6倍強になりました。この表からは、ASEAN・5とCLV・3カ国のGDPを比べることもできますが、CLVはASEAN・5の約11%しかありません。1割強しかない国ですが成長率ではASEAN・5を上回っているのは、経済規模が小さいからだといえます。規模の小さい経



CLMV及びアセアンにおける経済成長(GDPの成長率、%)、1994-2016



済というのは、一般に経済成長率は高くなりますが、経済規模が大きくなると成長率は低下します。それは日本の成長率を見てもわかると思います。

先程のパンダラさんの話の中で、ラオスの就業人口の7割は、農業部門で仕事をしていることが指摘されました。しかし、GDPに占める農業のシェアは30%しかありません。すなわち70%の人口で、30%のGDPを生み出すという現状は、これからもそのままとしたらどうなるでしょうか。これからも経済成長を続けるとしたら、工業とサービス部門が発展していかないと、成長はむつかしいと思います。労働者が農業部門から工業部門とサービス部門に移動するためには、農業部門での効率と生産性が上がらないといけないわけです。この点は、ラオスの大事な問題です。このスライドに示した表は、1994年から2017年までのGDPに占める農業部門、工業部門、サービス業部門のシェアをみたものです。この表からも、この20数年間で、経済的には農業のシェアは減って、工業とサービスは少しずつ増えていることがわかりますね。

次に、ラオスの経済についてみておきます。ラオスの経済は、近年少しずつですがよくなっていると思います。ラオスは、特に輸出なんかは結構資源が多いといえます。資源というのは、電力、木材、コーヒー豆、お米などと、銅などの天然資源があります。輸出にはほかに、軽工業の製品などがあります。

農業の生産性が上がれば、余った農業労働者はどこに行くかという、最初の工業の部分というのは、労働集約的な工業です。例えば縫製業とかです。そこで、今日は縫製業について写真を見ながら少し話します。ラオスの縫製業は、例えばベトナムやカンボジアと比べると、簡単なモデル、安いモデルが中心となっています。その理由は、おもに技術的な問題で、たとえば日本に輸出しようとする場合、スタンダードとかいろいろルールがたくさんありますから、それをクリアするのはむつかしく、ラオスの会社ではなかなかできてないのです。

もちろん、日本の企業もラオスに進出しています。日本の中小企業は、優れた生産技術と経営技術、5S、などが特徴です。5Sというのは皆さんご存じと思いますが、整理、整頓、清掃、清潔、しつけのことで、これらはラオスの工場でも入っています。この工場働く労働者は、ほとんどが農民です。農業生活には慣れていますが、1日8時間労働、休

憩は1回か2回しかないという生活には慣れていません。ラオスの農民は、疲れたとおもったら休憩します。工場での労働は、しんどくても休憩時間になるまでは続けないといけません。そういう生活は、多くの人はまだ慣れてないので、このようなことを教えるのもすごく難しいです。

このスライドにある写真の企業は、大阪に本社がある「ヤマキ」という会社です。ラオスに工場がありますが、ほかにもタイなど多くの国に工場があります。ラオスの工場で作られているのは、ほとんどが男性用シャツです。この会社では「5S」が実施されていて工場内はきちんと整理整頓されています。とてもいい会社だといえます。

こちらの写真は現地のローカル企業です。それほどきれいとは言えませんね。ノウハウとか技術、経営技術、生産技術はまだまだです。服装とかもバラバラです。この会社は、ミャンマーやカンボジアと同じように、ヨーロッパやアメリカに輸出ができます。ラオスの場合は、ほとんどはヨーロッパ向けが多いようです。日本まではまだ、品質が足りないという話です。今後、この縫製業の発展のためには、農業の生活と工業の生活に変化が起これなければなりません。同時に、8時間労働に集中できるような訓練も必要です。もう少し価格帯の高いものは、細かな作業が求められますし、もっと厳しい規律が求められます。今のラオスの労働者にはまだちょっとレベルが足りないと思います。

縫製業以外ではどのような部門が有望でしょうか。ベトナムには、本田やトヨタをはじめ多くの日系企業が進出していますね。それらの企業へのサプライヤーは、デンソーのような日系企業も進出していますが、ほとんどのサプライヤーは現地の中小企業です。しかし、日系企業のサプライヤーになるためには、ものすごいイノベーションとか、先程述べた5Sなどの改善をしないとイケないし、自らの生産性などをレベルアップしないとイケません。この辺は、ベトナムが一番うまくできていますが、ミャンマーやラオスはまだまだそこまでいっていません。

ラオスはこの20年、ある程度の企業発展がみられました。以前は、共産主義体制でしたから、政府の政策は民間企業の活動を禁止していました。この表は、1975年以降の企業数を示したのですが、この表を見ると、首都ビエンチャンの企業数が最も多いことがわかります。ラオスの県は、首都ビエンチャンをのぞいて、17県ありますが、それらの県の企業数はそんなに多くありません。ラオスには、大きな都市は3つか4つしかありませんが、全体でも4万5000社程度しかありません。ベトナムなどは、多分何十万社か、おそらく100百万社くらいあると思います。

アジアでは今、広域での自由貿易圏が形成されつつありますが、ラオスのローカルな中小企業も、これからは外国の企業と厳しい競争にさらされることになります。ラオスの企業が、そうした厳しい競争に耐えることができるかどうか、例えば日本企業のサプライヤーになることができるかどうか、すなわち、自前の生産技術や経営技術を発展させることができるかどうか、これはこれからの大きな問題です。だからラオスの政府は現在、「ビジョン2030年」という目標を立てて、2030年までに段階的に経済改革を進めていく計画です。

ラオスはほんとに、これからどんな国になるのでしょうか。この写真は、ラオスの中小

企業です。この企業は、家などに塗るペンキを作っていますが、材料はタイから持ってきて混ぜるだけです。しかし、この入れ物に入れて混ぜただけでも、「Made in Laos」となるんです。ペンキの原料を作ることはまだできないので、本当に簡単なプロセスしかできていません。ということは、英語なら「value added」といいますが、「付加価値」という点では、低い付加価値しかありません。付加価値が低いということは、労働者の収入も低いということになります。もっといろいろなプロセスができるようになると、例えば材料・原料なども作るができるようになると、労働者の収入ももっと上がることになります。残念ながら、ラオスはまだ、産業とか工業では、まだまだほかの国、まわりの国より遅れています。

もう1つの例ですが、この表は、ラオス語で「5S」について書かれたものです。これはサンダルを作っている企業です。本当に簡単な製品です。ゴムはラオスで生産されますが、デザインとか、付属のきれいなデコレーションなどの材料は、タイから持って来て、ここでは安い労働力を使ってこのようなサンダル生産しています。ラオスの労働者はほんとにわずかな賃金だけもらいます。月に日本円にして2万円程度です。日本と比べると何十倍という差があります。ラオスは、これから本格的に産業を発展させるには、まだまだ時間かかると思います。

この写真はもう1つの例ですが、屋根に使うトタンを作る会社です。材料はタイから持って来て、この機械をつかって、プレス加工するだけです。ここでプレスするだけで、「Made in Laos」ということになります。このように、ラオスの会社は、材料や原料は全部タイから持って来て、わずかな簡単な加工だけをやっています。この写真を見ても、日本の場合と比べると「5S」も全然駄目ですね。工場のセットアップとか、工場のアレンジでも、日本のスタンダードとはかなり違いがあります。やはり、このままでは日系企業のサプライヤーにはなれないということがわかります。

それでは、問題は何かというと、一番大きな問題は教育の問題です。生産性を上げるためには、やっぱり労働者の教育が重要です。教育というのは、学校の教育と、トレーニング、専門学校などの教育も重要です。もう1つは、「entrepreneur」という起業家精神を養う教育です。やっぱり、人的資本、すなわちhuman capitalも向上しないといけないということが分かります。さらに、技術の問題があります。技術というばあい、生産技術(production technology)と、経営技術(management technology)の両方が開発されないと、なかなか農業中心の国から工業・サービス中心の国に発展していくまでには、長い時間がかかると思います。以上で、ラオスの経済発展についての話を終わります。ありがとうございました。

**坂田** スクサバン先生、どうもありがとうございました。今、お話しいただいたように、ラオスの中小企業というのは数も少ないし、歴史も浅い、技術水準も低いということでした。したがって、例えばこれから技術水準を上げていって、ベトナムのあとを追う、あるいはタイのあとを追う、あるいは韓国のあとを追うというような、そういう工業化のパター

ンはラオスではちょっと、非常に難しいんじゃないかという前提のお話だと思います。したがって、ラオスが生き残れる中小企業には、どのような中小企業があるかということが問題になると思います。そこで、農業との兼ね合いが重要になってくるのではないのでしょうか。このあと、10分間の休憩を挟んで、後段においてその点を少し議論してみたいと思います。私は、農業関連の工業、例えばトラクターとか農機具をつくる工場とか、ビニールハウスをつくるとかといったことを中心とした工業化が現実的ではないかと考えています。そのような工業と農業とのコラボレーションというと適切かどうかわかりませんが、そういう中小企業の発展が考えられないかというのが私の考えている工業化です。そういう点を含めてこのあと少し議論をさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

## パネルディスカッション

### 農業・観光振興を通じた発展は可能か

**進行** お待たせいたしました。これより、先ほどの講演を受けまして、3名の講師と本学経済学部教授坂田幹男の対談、および会場からの質問への回答を行います。よろしくお願いいたします。

**坂田** それでは、後半の部を開始したいと思います。本日はテーマが「農業・観光振興を通じた発展は可能か」とさせていただいておりますが、これまでの報告では観光の話が全く出てきませんでした。それで、実は私はこれまでラオスに毎年出かけて行っているんですが、そのときに仕事のついでに撮った写真がありますので、皆さま方にラオスの写真を見ていただいて、ラオスにはどのような観光資源があるかということを紹介しておきたいと思います。これから、スライドだけ簡単に紹介させていただきます。

ここで後紹介されたスライドは以下のようなものであった。

ビエンチャンの市内のパトゥーサイという戦没者の慰霊碑、ビエンチャン市内を流れるメコン川河畔の様子、雨期と乾季のメコン川の様子、メコン川河畔のナイトバザールの風景、ビエンチャン市内の有名な寺院、タートルアン、ワット・ポー・パケオ、ワット・シーサケートの紹介、ブッダ・パークと呼ばれるブッダをテーマにした公園、タイとラオスを結ぶ第1メコン国際橋、第2国際橋、第3国際橋、ラオスの伝統的な踊り、ビエンチャン郊外の市場の風景、有機野菜のマーケット、中国がラオス国内で建設している鉄道建設現場、ラオス最大のダム湖ナムグム・ダム、ナムグム川の遊覧船、シェンクワン県のジャール平原、山岳地帯の滝、ラオスで唯一の温泉、シェンクワン県の高原の景色、世界遺産に指定されているルアンパバーンの風景、ルアンパバーンのナイトバザール、観光地バンビエン、ウドムサイの高地民族の村の風景、カムムアン県の鍾乳洞、ラオスとベトナムの国境税関、カムムア



ン県の美しいダム湖、ラオスで最も有名なダオ社のコーヒー農園、ドリアンの木と道端でドリアンを売る風景、ラオス南部の農村風景、など主に自然の観光資源がおもに紹介された。

### ラオスの農業の現況

それでは後半の討論に入らせていただきたいと思います。今日のテーマは、「農業・観光振興を通じた発展は可能か」とさせていただきますが、なぜこのようなテーマを設定したかと言うと、先ほど講演の中でもたくさん指摘がありましたが、ラオスの人口は、680万人強ですね。最近700万人になったと政府は発表していますが、もしそれが正確であるとしても700万人というのは大阪府の人口よりも少ない人口です。そして、面積は日本の本土とほぼ同じくらいあります。そして、工業化の経験が非常に乏しい。それゆえ、技術水準がとても低い。さらに、農業の就業人口が依然として7割強を占めています。そういう状況に加えて、ラオスの場合には、北部・中部・南部と人口が比較的バランス良く分散されています。こういう状況の国が、果たしてこれから低賃金を利用した工業化、外国企業に来てもらって、そして外資を利用した工業化という、これまでベトナムやタイ、あるいはマレーシアが行ってきた工業化と同じ道が果たして可能であろうかという疑問があります。

もしそれが難しいのであれば、ラオスの比較優位というのは、やはり農業だろうとおもいます。しかも、瀬尾さんも少し触れられました。ラオスの農民はこれまで非常に貧しかった。だから、お金がないから化学肥料が買えない。お金がないから、農薬が買えない。そういうわけで、実はラオスの農民は、これまでずっと有機農業をやってきたわけです。多くの農民が自給自足的な農業を営みながら有機農業をやってきました。それが今、い

わばGAPだとか、AOというかたちで注目を集めてきている。そこで、ラオスはむしろ、この有機農業の伝統を現代によみがえらせると言いますか、現代的にこれをうまく利用することができないだろうかということで、私は「農業と観光の振興を通じた発展は可能か」というテーマを挙げさせていただいたわけです。まず、最初にラオスの農業に詳しい瀬尾さんにずばりお聞きしたいと思いますが、瀬尾さんはそういうラオスの農業や観光振興を通じた工業化の展望について、率直にどのようにお考えかという点について、お考えを聞かせていただけないでしょうか。

**瀬尾** まず一般論からお話しします。ラオスはまだ経済的に発展の途上、まだ早い段階にいますので、これまで総じて、先ほどお話のありましたダオフンのコーヒー農園のようなところもありますが、総じて自分の家族のために農業の生産をしてきた方がまだ多いのですよね。だから、農家の多くの人の考えというのは、まず自分の食べ物を確保して、その上で、余ったら、仲買人が買いに村に来ますので、そういう人に、向こうの言い値で売ってしまって、それで持って行ってもらって、ちょっとお金を稼ぐというようなスタイルだったんですね。それがまだ残っていて、今お話ししているような、さらに農業を発展させていきましょうというときに、「ちゃんと売ること、商品が店に並ぶことを考えてつくらなければ」とか、あるいは「こういうニーズがあることを踏まえてつくらなければ」とか、そういったワンステップ上がった話をしようとすると、非常に困難に直面するのですね。「何でそこまでやらなければいけないの」、「何でここまでお金かけなければいけないの」と。だから今、1つの活路として有機農業やGAPの話をいたしました。それはJICAが今まで、その2つともに支援をしてきているのですが、現場に行くと農家の人に「有機農業をやったら、もっとお金が手に入りますよ」、「いいことがありますよ」、「GAPやったらいいですよ」と言っても、「何でこんな面倒くさいことをしなければいけないんだ」と言われてしまいます。有機農業だったら、農薬とか化学肥料を使えませんから、すごく手間のかかる有機の資材を使って、例えば虫が寄り付かないものをつくるか、時間をかけて自分たちで有機肥料をつくらなければならない。ある程度お金が入ってくると、農家のほうもやはり楽をしたいと思って、化学肥料を買ったりとか、農薬を買ったりするのですよね。だから、今までは、さっきもお話がありました。買いたくても、そういう農業の資材が買えないという事情があったのですが、できるようになってくるとだんだんそういう楽なほうに頼ってしまうという、またちょっと困った問題が出てくるのですね。だから、農業の指導の現場で直面しているのは、大局的に見て、ラオスはこういう道がいいのだろうと言いつつも、農家は「じゃあ、お金が入ったんだったらこうしたい」とか、別の方向を向いてしまうとか、楽な方向に行ってしまうとか、手っ取り早くお金が稼げる方向に行ってしまうかたちです。そのような例の1つが、農薬を使うとか、化学肥料を使うということなのですが、キャッサバをつくらうかとか、ゴムの木を植えようとか、そんなかたちになってしまっている状況もあるのですね。だから、そこはなかなか難しい問題があって、すぐというわけにはいかないのですが、徐々に徐々に、自分たちがどんどん市場と接点を持っていく中で、そうすると今度は、ASEANの統合の話もありますし、いろ

いろいろな産品と競争しなければならぬ人が出てくるのですよね。その中で自分たちがどういうふうになれば生き残っていけるのかをよくよく理解してもらいながら、それは長い時間がかかるのですが、そういう意味で有機農業が大事なんだ、GAPが大事なんだということで、やっていかなければいけないのではないかと考えているのです。とにかく地道に時間をかけて、今のところは申し上げたような活路があるのですが、そういう方向に進めていかなければいけないのではないかと実感を持っています。

### ラオスの経済成長の問題点

**坂田** どうもありがとうございました。次に、スクサバンさんにお聞きしたいのですが、スクサバンさんは、農業だけではなく、やっぱり工業、特に中小企業、ラオスの身の丈に合った中小企業の育成を考えなければいけないとおっしゃったんですね。それと、恐らく外国企業への期待もあると思うんですが、外国企業、例えば私がこれまでインタビューした日本の企業の方は、ラオスは人口が少ないので、進出してもすぐ賃金が上昇してしまうと考えておられました。だから、人口が680万ぐらいの規模のところには、なかなか企業としては進出しにくいとおっしゃっておられます。この点についてスクサバンさんはどのようにお考えか、聞かせねがえないでしょうか。

**スクサバン** ありがとうございます。たしかにラオスの人口は少ないので、例えばラオスで販売するというのは難しいと思いますが、ラオスで生産して輸出するのは可能性があると思います。先ほどラオスの技術水準の話をしました。ラオスの労働者の教育のレベルはとても低いです。したがって、ラオスの技術水準に見合った産業とか企業を育てることが重要だと思います。たしかに、農業は食糧を増産することによって貧困撲滅を図るということは重要だと思います。しかし、これからラオスがもっと経済発展とか経済成長をしていこうとする場合、例えば政府は7%の成長率は何とか維持したいと考えていますが、その場合には農業以外の分野が発展しないと難しいと思います。

今までラオスは、水力発電用のダムを開発してきましたが、皆さんご存じと思いますが、1カ月前ぐらいにラオスの南部のアッタプー県というところで建設中のダムが決壊して、多くの犠牲者が出ました。だから、これ以上のダムの建設というのも、大きな問題になります。これは私の個人的意見ですが、今は確かに人口は少ないですが、人的資本というのは教育とかトレーニングによって、品質というかクオリティーを高めることができます。したがって、人的資本というものを教育やトレーニングを含めて、これから発展させないといけないし、そうしないと今の成長率を守るのはなかなか難しくなるだろうと思います。

### ラオスの農業と経済発展

**坂田** ありがとうございます。次に、パンダラさんにちょっとお聞きしたいんですが、ラオスの農業省は一生懸命クリーン農業の取り組みをやっておられると思うんですが、ラオスの政府全体として農業をどのように位置付けているのか、あるいは、そのような農業を経済発展のエンジンにするということについて、ラオス政府はどのように考えているん

でしょうか。

パンダラ ありがとうございます。私が発表したように、ラオスの人口の約7割は農民だから、やっぱり農業の国ですね。だから、ラオス政府も農業部門での経済発展を第一に考えていると思います。現状では、ラオスの農業生産は第一です。でも、スクサバンさんの発表にもありましたが、どんな国でもGDPに占める農業の割合は、毎年だんだん減っていくのは自然ですね。それは一つの経済法則ですね。一国の発展のためには、農業分野から第2次産業へ、さらに第3次産業へと労働を移動しなければならないんですよ。しかし、同時に農業の生産量は必ず守らなければなりません。農業の労働者が減っても生産量を維持することが必要です。そのためには、技術水準を引き上げなければなりません。それは避けられないチャレンジですね。例えば、日本やアジアの国とかで、一人の人間で広い面積で栽培できるのは、すべて機械を使うからですね。だから、人口が少なく労働が少なくても、生産量は減らないんですよ。ではなぜラオスでもGDPに占める農業の割合が減るのかというと、農産物はそのままの状態で販売されるのではなく、工場で食品や原料として加工されたりするからです。ラオスの政府はもちろん農業作物は第1位と考えていますが、それらを加工する産業なども必要だと考えています。

### 貿易の重要性

坂田 その点ですが、経済発展を考える場合には、やっぱり成長のエンジンというのがどうしても要るんですね。そのエンジンの役割を何が果たすかということが鍵になります。成長のエンジンの役割を何が果たすかということを考えた場合に、果たして中小企業なのか、それとも、その農産物の輸出なのか。そこで、私はやっぱり貿易だと考えています。ラオスで現在輸出できるものと言えば、電力とか農産物ですね。他に、縫製品とか木製品がありますが、その中で何を主要な輸出品とするのか。貿易を成長のエンジンとするならば、どんな輸出を増やすかということが問題になります。その場合、一番可能性が高いのは農産物じゃないかと思うんですが、その点、パンダラさん、どうなのでしょう。

パンダラ 何を輸出するかということは、難しい問題です。坂田先生が言ったことも、私は賛成です。たしかに、ラオスの政府も農産物の輸出に期待を持っています。ラオス政府が有機栽培やオーガニック、GAPに力を入れているのは農産物の付加価値を高めるためです。瀬尾さんも説明されましたが、ラオスはずっと昔から有機栽培していました。今でも有機栽培、化学肥料も農薬も使わない農業をしています。しかし、それはまだ「有機農業」として認定されていません。第三者が認定しないと、信用を得ることができませんよね。だから、認定システムが必要なんです。有機栽培のシステムが必要になってきます。

もう1つは、私の意見ですけど、ラオスの人口と面積はアジアの他の国と比べるとちょっと少ないんですが、これは与えられた条件ですから、ここから出発するほかありません。すなわち、このような条件の下では、生産量を増やす努力をしても、タイとかベトナムのような生産は絶対できないのです。だから、大量生産の代わりに、生産量よりも品質や付加価値をつける方に向かう方がいいのではないかと考えています。だからこそ、GAPや



オーガニック、さらにはGI(Geographical Indication)といった取り組みが重要になってきます。それから、もう1つの理由は、GAPもオーガニックも、現在ラオスはASEANとハーモナイズ(調和)しており、ASEAN域内のモノが自由に国境を行ったり来たりする自由貿易がラオスの農業にとって有利になっているということも見逃せません。

#### 質問—農業の高付加価値化

坂田 分かりました。参加者の方からもたくさん質問をいただいております。いくつか共通した質問もありますので、質問に沿ったかたちで少し話をしていきたいと思います。

最初の質問は、農業の高付加価値化ということに関連したものです。パンダラさんは、農業の高付加価値化ということをおっしゃったんですが、そういう農業を高付加価値化する試みは、ご存知のように日本では農業の6次産業化という言葉で表現されています。6次産業というのは、農業は1次産業ですが、第2次産業、すなわち製造業、そして第3次産業である流通・販売と、これらを一貫してやることによって、農産物の付加価値を高めようという考え方です。ラオスではこういう取り組みが少しでもなされているのかどうか、あるいは、そういう検討をされているのかどうかということを実例を交えて教えてくださいということです。まず、瀬尾さんにお伺いしたいと思いますが、瀬尾さん、6次産業化への取り組みといった事例をご存じだったら教えていただけないでしょうか。

瀬尾 率直に言って、あまり事例は多くないと思います。小さい規模での、何か果物を使って、それをドライフルーツにするとか、その程度のことはもちろんやっていますが。数少ない例というのが先ほどあったダオフンのコーヒーの例。自分たちの農園でコーヒーをつくって、それをインスタントコーヒー、最近はいろいろなフレーバーコーヒーとかをつくっていますが、そういったものでラオス国内まで作りあげて売っていくというようなことをやっていますので、それは1つの6次産業化の例だと思いますが、ほとんどの場合は、つくったけど、さあどうしようか、どこに売ろうか、どこに持ってこうかというところで、それが現状ではないかと思います。それはだから私もアドバイザーとして農林省にいたときに、6次産業化という言葉はあまり使わないんですけど、最近はやりのバリューチェーンというものです。まず、付加価値の高いものをつくって、その価値をうまくつないでいて、売るときもその価値の高いものを売っていくという、その連鎖をきちんとつないでいく、きちんと確保していくということ。これについて、日本として、JICAとして何か手伝ってくれないかと、よく言われているわけです。それで、最近JICAのプロジェクトも、昔は灌漑の支援、農業生産技術の支援ということが中心だったんですが、最近はその前のプロジェクト、それをやって、だけど農家から、つくったけど、でも売っていくところがないよね、あんまりもうからないよね、利益ないよねということで、今、また同じような有機のプロジェクトや、クリーン農業のプロジェクト、あるいは、灌漑のプロジェクトもやっているんですが、まさに今やっているそれらのプロジェクトは、出口、つまり、どこに売っていくのか、価値をどう付けて、どうつないでいくのかということまでを含めたプロジェクトの構成にして、日本としてはそういうラオス側からの要請に応えようとは

しているところです。

**坂田** ありがとうございます。次の質問は、パンダラさんにお伺いしたいと思います。農業の高付加価値化ということを考える場合には、やはり機械化と言いますか、農産物の加工をしたり、農業を効率化していくための農業機械が必要になりますが、そういった何か農業の機械化、あるいは効率化に対する計画というのは、ラオスの農業省は持っておられるのでしょうかという質問です。

**パンダラ** 瀬尾さんもご存知のように、計画はあります。ラオスには5カ年計画、10カ年年、そして「20年ビジョン」があります。この中でもきちんと書かれていますね。農業労働人口を減少させて、高い技術を導入するということです。高い技術という意味は、ただ機械使うということだけではありません。農業には、いろいろな技術があつて、もちろん機械もありますが、教育はもっと大切です。農家さんの教育とか、つまり、より高い技術を使うことの利点に対する意識の啓発とか、そういう点もありますね。

**坂田** そういう農業振興などにおいて、あるいは農業の近代化などにおいて、何かほかの省とそういう具体的な連携をして進めていくというような取り組みは、実際に実行されておられるのでしょうかという質問です。

**パンダラ** ほかの省とはどういうことですか。

**坂田** 例えば、農林省だけじゃなくて、産業省とか工業省とか、そういう省とのコラボレーションと言いますか、タイアップがあるかどうかということですね。

**パンダラ** それは多分どんな国でもあると思います。いろいろなシステムがあつて、もちろん農林省は自分の省だけで全部何でもすることはもちろんできないですね。労働省と一緒に計画したり、あるいは教育とか技術とかの面では、文部科学省との協力も大事ですし、あと、保健省とかそういうところも関係があります。さきほど瀬尾さんが示されたデータで、子供の成長に関するものがありましたが、ラオスは確かに経済成長しているわけですが、ニュートリション、つまり「栄養」の問題がまだ完全に解決されているわけではありません。皆さんは想像できないでしょうが、都市部の人と農村部の人の間には、大きな差があります。田舎というか農村部では、栄養の足りていない人はまだ5割もいます。だから、ラオスの政府も、栄養状態の改善をもっとも重視しています。農民には、どのようなものが栄養価が高いとか、栄養価の高い野菜作りとかを、どうやって食べればいいのかとか、教育省などが中心となって山岳民族などに教えたりしています。面白い話があるんですよ。シエンクアン県の田舎に行ったときのことで、ある村では彼らはたくさんのカボチャを作っていました。でも、彼らはカボチャが食べられることを知らないのです。食べられることを知らない。カボチャを全部豚の餌にするんですよ。だから、そういう村は、栄養不足の村です。

もちろん、質問のようなコラボレーションは各分野にあります。こういう栄養の分野もほかの省と一緒にやります。どうやればコストを下げ、高い品質のモノを作れるかといった経済的な問題は、委員会を作って、各部門の協力をセットします。例えば、栄養の問題は、農業省はもちろんですが、教育省と保健省などと一緒に仕事しなければなりません。

### 質問—有機農業と生産性

**坂田** ちょっと専門的な質問がありまして、瀬尾さんにお答えいただけたらと思います。有機農業と農業生産性との間にはトレードオフ、すなわち、有機農業を取れば生産性が劣るし、生産性を優先すれば、有機農業は多少犠牲にしなければいけないという、そういうトレードオフの関係があるんじゃないかというご質問なんですけど、この点はどう考えておられるのでしょうか。

**瀬尾** なかなか生産性の問題を捉えるのはちょっと難しいんですが。確かに、有機と言ってもいろんな技術があって、農家、生産者によって有機肥料のつくり方1つにもノウハウがあったりして、なかなかひとくりにくれないんです。その生産性というのを短期間、1年で見るとか、あるいは長期的に見て、10年単位で見るとかまたそれは変わってくることもあるんですよ。ただ、一般的に短期で見ると、やっぱり化学肥料のほうが効果というのがある意味すごく予測しやすいので、1年だけに限って言って、もうよーいドンでどっちが取れるかってやれば、化学肥料を使ったほうがコントロールしやすい、高い収益を取りやすいというのはあると思いますが、ただ、それをしてしまうと、土がやせたり、養分が足りなくなっていくとか、5年後、6年後になると、その土地の生産性が落ちて、結局は有機農業のほうが勝るとか。だからそれは、時間軸の置き方でちょっと変わってくると思うんです。

### 質問—ラオスのインフラ整備

**坂田** ありがとうございます。次の質問に移らせていただきます。農業の発展のためには、インフラの整備が必要だということは当然ですが、今、ラオス政府が取り組もうとしているインフラ整備と、GMSプログラムはどの程度進んでいるかという質問です。ちなみに、GMSプログラムというのは、メコン圏諸国が協力してインフラなどを開発するという、アジア開発銀行がイニシアチブを取って進めているプロジェクトのことを言います。このGMSプログラムはどの程度進んでいるか、インフラ開発でどの程度進んでいるかということです。それから、ラオス政府はどのような農業関連インフラの整備をやるようとしているかという点について、パンダラさんに教えていただきたいんですが。

**パンダラ** 農業の発展のためのインフラストラクチャーはもちろん必要ですね。瀬尾さんの発表内容でも触れられていましたけど、灌漑システムの整備は農林省の中で一番お金使う分野です。だから、灌漑システムをつくるということに一番力入れていますね。さらに、農業発展に直接関係するインフラストラクチャーだけではなく、例えばラボラトリー、研究施設とかを充実させて、品種改良とか新品種の開発とかしていかなければなりませんね。

**坂田** 瀬尾さん、GMSプログラムは、経済回廊がほぼ完成したと言われてるんですけど、それ以外の分野での協力はどうなんでしょうか。進んでいるのでしょうか。

**瀬尾** メコンの協力ですね？

**坂田** はい。

**瀬尾** 私が承知しているのは、最近日本が関与するかたちで取り組んでいるのは、やっぱ

り森林保全の関係ですかね。メコン、水に関係することですので、流域の国が協力して森林管理をやっている。それはもちろん気候変動対策という文脈もありますが、そういったことを1つの国がやるよりは、同じ川を共有するところでやっていったほうがいいだろうということで、その取り組みは、今、日本あるいはJICAが関与するかたちで進んでいるということは、私も聞いております。

### 質問—ラオスの教育制度

**坂田** 時間も押し迫ってまいりましたので、ご質問をできるだけ取り上げたいと思いますので集中的に行いたいと思います。スクサバンさんに教えていただきたいんですが、経済を発展させるためには教育問題が重要だということですが、現在のラオスの教育制度はどうなっているかというご質問です。

**スクサバン** 端的に言いますと、日本は近代化が始まった明治時維新から今日まで約150年ですが、ラオスは約40年です。そういう点でいうと、あと100年の時間が必要だと思います。日本は小学校6年間、中学校3年間、そのあと高等学校3年間ですね。ラオスの教育制度は、小学校は5年間、中学校は3年間、高校は4年間です。しかし、ラオスの政府はお金がないので、中学校の義務教育化というのはなかなか実施できていません。多くのラオスの子供は、小学校が終わったら半分程度しか上の学校には進学できずに、多くは家の仕事を手伝ったり外で仕事をしたりしています。ですから、政府がもっと子供に義務教育を受けさせるような努力をすることはとても大事なことです。ラオスの人口は東京の半分ぐらいですが、民族は44ぐらいあります。したがっていろいろな民族の言葉があります。私は、外国の言葉も勉強していますが、ラオスの言葉は一つしかできません。日本には、方言はありますが日本語は一つしかありません。しかし、ラオスにはもう10以上の言語があります。この問題は、発展について考える場合にはとても難しい問題だと思います。

**坂田** ありがとうございます。パンダラさんにお聞きしたいのですが、人口が少ないとやっぱり工業化には不利ではないか、だから人口増加対策をラオスとしては何か取っているのかというご質問ですが、いかがでしょうか。

**パンダラ** 人口を増やすという対策ですか。それは特に何もしてないですけど、子供の数には制限はありません。ただし、スクサバンさんもおっしゃったように、ラオスには多くの民族が生活しています。人口不足の問題は確かにありますが子供の教育の問題もあります。また、都市部と農村部では格差もあります。

**坂田** 質問はほかにもたくさんあるんですが、農地の集約化について何かラオス政府は取り組んでいるかという点ですが、いかがでしょう。パンダラさん、農業の集約化という意味は分かりますか。

**パンダラ** 農地をまとめるということですか。

**坂田** そうですね。

**パンダラ** それはありますね。農地の集約化だけでなく、小さな村をまとめて、大きな村をつくるというような取り組みも行っています。ラオスは、人口が少なく、民族が多く、

したがって習慣も多いです。さらに、ラオスの国土は大きくはないですけど、人口に比べるとすごく広い。例えば山奥の小さな村では、数家族だけでばらばらに住んでいます。そんなところでどうやって子供の教育をさせるのか、どうやって電気を届けるのか、どうやって水道を引けるのか、という問題があります。だから、こういう小さい村を集めて、大きい村をつくって、いろいろなサービスができるようにするようなプロジェクトもあります。でも、それも多くの課題や問題が出るんです。それぞれが違う習慣、違う文化、違う言葉を持っているので、すべてがチャレンジでした。あと、機械を使うために、小さい農地を集めて大きい畑をつくるという試みもあります。しかし、その試みにも限界があります。先程写真をお見せしましたが、ラオスのお米栽培畑にはなぜ大きい木があるのか。なぜ全部木を切って広い面積にしてトラクターなどを使わないのかと思われる方もおられるでしょう。そうすれば、少ない労働量で済むのではないかと。実はそのような方法には制約があります。私たちの研究では、例えば木を残さず伐採して2ヘクタール以上の大きい畑をつくった場合、自然のエコロジーというか、自然の生態系が壊れてしまうのです。それによって、いろいろな虫が、あるいは小さい動物が破壊されたんです。だから、ラオスでは2ヘクタール以上の農地にはしないのです。しかし、2ヘクタール以内で、もちろん小さい畑を集めて大きい畑つくって、機械を導入するというプロジェクトはあります。でも、2ヘクタール以上にはしません。なぜか。環境の問題を考えないといけないからです。なぜ環境の問題を考えなければならないか、それはラオスの政府が目指している目標は、クリーン農業だからです。これが一番大事なことです。

**坂田** ありがとうございます。ほかにもいくつか質問をいただいているんですが、時間の関係で取り上げることができませんが、ご容赦いただきたいとおもいます。この討論はこれぐらいにして、最後のまとめに入りたいと思います。

## まとめ

**進行** ありがとうございます。それではこれより、本学比較地域研究所 所長、経済学部教授、前田啓一よりシンポジウムの統括と閉会あいさつをさせていただきます。

**前田** パンダラさん、スクサバンさん、瀬尾さん、今日は熱心にご討議くださりまして、ありがとうございます。また、坂田先生、司会の労をお執りくださりまして、感謝申し上げます。

今日のお話を通じまして私は、素人なのですが、幾つかの感じました。縷々(るる)多くのご説明の中で、ラオスの農業は素晴らしさと、その可能性について、何度もお聞きしたと思います。そして、ラオスには地域の多様性が豊かで、高原地帯もあって、潜在能力も高いということ。そして、観光業にもメリットがある、そういう趣旨だったと思います。そこで、最後の坂田先生のご指摘にもあったわけですが、そういう素晴らしいラオスの農産物を経済発展のテコにしていく、つまり、恐らくはラオスの農産物を世界市場に

向けて打って出ていこうというお考えだったと思います。そのためには、その素晴らしいラオスの農産物を消費者に届ける必要があります。しかし、道路が不足している、鉄道がない、空港までとっても遠い、これをどうするんだということが抜け落ちている。すなわち、インフラ整備の問題が全くと言うと失礼ですが、まだまだ未整備です。つまり、ロジスティックス、物流も一緒に整備する議論をしないと、やはり農業は農業だけでは論じきれない部分が恐らくたくさんあるのではないかと。さらに、インフラだけではなく、農民の教育指導が必要だろうと思います。恐らく、有機栽培をやりましょう、あるいはやる必要があると言っても、スクサバン先生の話の最後にありましたように、学力水準が小学校卒業程度では、やはり難しいところもたくさんあるのかもしれない。

課題はほかにもたくさんあります。さらに私が一番心配するのは、そういうインフラ整備、あるいはシステム構築をしていく上で、中国の金に頼るしかないという現実があります。これは非常に大きな問題です。データを見ると、ラオスの直接投資残高の60%以上が中国資本でした。これにはびっくりしました。ラオス経済の首根っこは中国に押さえられている。そういう状況の中で、直接投資の受け入れ国のバランスを図っていく必要があると感じています。私は、そこからさらに、恐らくは輸出先の多様化が必要になってくるだろうと思います。つまり、今日の議論ではラオス一国を論じられたんですが、隣のベトナムにはダラットという非常に素晴らしい高原野菜をつくる場所があります。あるいは、タイの東北部も立派な野菜、農産物産地ですよ。つまり、ライバルが周辺にいっぱいあるわけです。その中で、ラオスがどう生き残っていくかということを考えたときに、例えば、ベトナムのダラットではより高品質のレタスをつくる、そしてラオスの高原では、中レベルのレタスをつくるといったような、品目、品種間での、すなわち付加価値間での分業・特化が必要かもしれないと思います。そして、さらにはもっと輸出先の話し合いが必要かもしれません。ASEANの域内にはラオスが輸出する。あるいは、タイが輸出する。そして、ベトナムはTPPを使って日本に輸出する。そうすると、さしあたりベトナムとタイ、ラオスはバッティングしません。タイも近いうちにTPPに入りますから、そうなると、残るラオスは、ASEAN10カ国の供給者になれるわけですね。そのような輸出市場向けの、輸出市場多様化をめぐる議論を、ASEANで早急に行わなければならないのではないのでしょうか。かっこよく言いますと、市場の組織化について、あるいは、統合を深めていく話し合いがASEANで必要になろうかと考えています。

そして最後に、中小製造業についてですが、スクサバンさんが強調なさいました縫製業は私も大事だと思います。ただ、問題は、ベトナムも同じなんですが、糸をつくる工場がないんですね。川上工程のものが何もない。つまり、中国人が外部から持ってきたものを低賃金の女工さんがミシンで縫う、それだけなんです。だから付加価値の低い工程にならざるを得ない。かつての私であれば、これを否定いたしました。単なる国際下請けで、低賃金が活用されているだけではないかと、学生時代にはそんな気持ちを持っていたんです。しかし、去年、北ベトナムのバクザンというところの非常に大きな縫製工場に行き、少し考えが変わりました。ここの、ユニクロのウルトラ・ライトジャケットをつくって

る大縫製工場を見て、縫製業にもかなりの可能性があるのではないかと考えるようになりました。現状は低賃金であっても、まずは現金収入が農民に行き渡るプロセスがあります。これがあると、子供の教育にお金が回っていくチャンスが出てくるのではないかという気がいたしました。縫製業を否定するのではなく、それを生かした次の経済発展との組み合わせが必要なのではないかと考えるようになりました。その意味では、農業か工業か、という二者択一ではなく、私は両方を取ろうとあえて申したいと思います。それにプラス、観光ですね。このトライアングルで何とかいきたい。トライアル経済発展構想とでもいえばよろしいのでしょうか。私は、どちらか一つというようなことではないのではないかと、そんな思いをいたしました。本日は、このような多くのことを学ばせていただきました。すぐに解決すべきことも多いと思いますが、なかなか難しい問題が多かろうと思います。このようなチャンスをくださいました先生方に改めて御礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

**進行** 前田先生、ありがとうございました。これをもちまして、本日の講演会を終了させていただきます。もう一度、パンダラさん、瀬尾さん、スクサバン先生、坂田先生に盛大な拍手をお願いいたします。

(2018年10月6日、大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天で開催したシンポジウムの記録である)